

コロンボ警部がジム
リーダーサカキに目を
つけたようです

rairaibou (風)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真夜中のトキワジム、ジムリーダーサカキがロケット団のボスである事を見破ったジムトレーナーが、ロケット団幹部によって殺されてしまう。

その場に居合わせたサカキは、自身がその場にいたことを誤魔化すため、幹部に現場を荒らし放火することを命じ、自身は酒場にてアリバイを作り、トキワジムが燃え上がるのを目撃する。

翌日、現場からはジムトレーナーの死体が発見されるが、カントー警察局の人間はそれが物取りによる突発的な殺人である事を疑わず、強盗放火殺人として事件を片付けようとしていた。

ちようどその頃、ロサンゼルス市警（概念）からカントーへ研修に来ていたコロンボは、ふとした興味からその事件現場に赴き、現場の不自然な状況に気づいた。

目次

1.	1.	1.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
2.	1.	0.	英雄	標的	展開	教育	搜查	遭遇	推理	登場	發覺
挑戰	崩壞	布石									
135	124	111	101	90	79	68	57	44	32	22	1

1.	1.
4.	3.
決着	切札

1. 発覚

ケンタロスの『すてみタックル』が、ニドキングに炸裂した。

肉と肉がぶつかりあう鈍い音がジムの中に響き、その試合を見ている誰もが、その威力を想像して顔を歪ませる。

ニドキングはそれを受け止めようと踏ん張っていたが、暴れ牛のパワーには敵わず、弾けるように地面を転がった。

なるほど、戦いをよく知っている。と、トキワジムリーダー、サカキは、対戦相手を手を評価した。ニドキングのトゲだらけの外殻ではなく、無防備な腹を的確に狙った『すてみタックル』、その選択だけで相手の技量を読み取る。

「最後だ！」

戦闘不能になったニドキングを戻し、言葉通り最後のポケモンを繰り出す。

対戦相手のトレーナーは、そのポケモンを確認するより先に、再びケンタロスに『すてみタックル』の指示を出した。ケンタロスはその命令に忠実に、現れたポケモンを攻撃する。

だが、今度のポケモンは、逆にケンタロスを弾き飛ばす。ケンタロスも、トレーナー

も、目を見開いて驚きを表現した。

「さあ、どうする？　力だけではかなわんぞ」

現れたポケモン、ドリルポケモンのサイドンは、フンと力強く鼻息を吐き、怯えているようにも見えるケンタロスの両角をむんずと挿んだ。それは、本来ならばかわすことが出来た動きかもしれないが、ジムリーダーサカキの最後の切り札であるサイドンに、トレーナーも、ケンタロスも、圧倒されていた。

『じごくぐるま』

サイドンはその怪力でケンタロスをブンと振り回し、回転をかけるように宙に放り投げた。それは、彼等にとって初めての経験だった。翼が生えていないという先天的な身体構造と、鍛えに鍛えて後天的に作り出した重厚な肉体、それら二つは、ケンタロスという種族を、空から切り離すのに十分なはずだったし、他のポケモンの腕力で空に舞い上げられるなど、考えてもいなかった。

頭から落ちないようになんとか体を捻りながら、ケンタロスは地響きと共に地面に叩きつけられる。なんとか首を守ることが出来たが、鍛え上げられた肉体は、比例的に落下のダメージを増やしていた。

このサイドンこそが、カントー八つのジム最後の試練だった。それまで力に頼ってきた挑戦者にとって、そのサイドンのフィジカルは遥かに高い壁だった。

しかもそれに、カントー八つのジム最強のジムリーダーであるサカキのテクニックが加えられる。単純な考えでは、決して乗り越えることは出来ないだろう。

対戦相手のトレーナーは、苦しい顔を見せながらケンタロスをボールに戻す。カントー最強のジムリーダーであるサカキに力押しが通用すると思っていたわけではないが、やはり自分たちが積み上げてきたものが通用しないという体験は、単純に受け入れることは難しいだろう。

だが、そのトレーナーは、決してそこで立ち止まるようなトレーナーではなかった。物事が、バトルが単純でないことを多少知っている実力者であるからこそ、彼はトキワジム以外七つのジムに認定されている。

トレーナーが次に繰り出したポケモンを一目見て、サカキはサイドンに『じしん』の指示を出した。それは、カントー最強のジムリーダーらしくない速攻だったが、その対面における最適解でも合った。

トレーナーが繰り出したポケモン、人のようで少し違う姿をしたルージュラは、サイドンよりも当然素早く、なおかつサイドンの弱点であるこおりタイプの攻撃を操ることのできる種族だった。

だが、フィジカルが弱いという弱点もある。だからこそサカキは、先手を取られるより先に速攻を選んだ。その迫力に対戦相手がひるめば、そのまま一気に押し切ることも

できるからだ。

しかし、迫り来る巨体を前にしながら、ルージュラと対戦相手のトレーナーはひるまなかつた。むしろ、そうすることこそが、この流れこそが当然だと心の準備が出来ていた。

『れいとうビーム』！』

指示を待ち構えていたのだろう、ルージュラは吐息を吐き出すように冷気の光線を作り出し、サイドンを迎撃する。

氷に弱いじめんタイプのサイドンは、それに抵抗することが出来なかつた。

☆

「おめでどう」

サカキはそう言って、トキワジムがそのトレーナーを認定した証であるジムバッジを、対戦相手のトレーナーに手渡した。

トレーナーは、興奮と緊張からかガチガチに、ブリキのように不器用に手を振りながらそれを受け取った。

サカキは、トレーナーのそのような動きを微笑みながら眺めていた。この瞬間は、ジ

ムリーダーとして最も誇らしく、最も幸せな時間の一つだ。彼はトレーナーが一人前になる瞬間をこれまで何度も見てきたし、自らも一度、その興奮を味わっている。

トレーナーにとって、バトルに負けることは屈辱だ。たとえそれがジムリーダーとして強さを制限されたパーティであってもだ。だが、その幸せな瞬間を味わえば、そのすべてが報われる。

さらにサカキは、そばにいたトレーナーから円盤状の機械を受け取って、それもトレーナーに差し出す。

「これも持っていきなさい」

それが『わざマシン』と呼ばれる、ポケモンに技を教えるための道具であることは、トレーナーの間では常識だ。

「これは『じわれ』と言う技で、相手を一撃で戦闘不能に持つていける、かつて私が開発した大技だ。餞別として、持つていきなさい」

トレーナーは、感激しながらそれを受け取った。サカキのポケモンたちが使う大技『じわれ』を、彼が知らないはずがない。

「もし使わなくても、売ればいい金になるはずだ」

ははは、と、サカキは軽口を笑ったが。トレーナーはそれを冗談とは受け取らなかったように、ブンブンと首を横に振った。

「これから、君は一流のトレーナーとして世に出る。いつか、本気の私と戦うことができればいいね」

最後に握手を交わしながら、サカキはトレーナーにそう声をかけた。

トレーナーは今度は何度も首を縦に振りながら、サカキと戦える日を想像する。このジム戦が、サカキの実力そのものではないことを、彼は知っている。

「もし何か困ったことがあれば、なんでも私に相談するといい」

そう言って、サカキはトレーナーを見送った。

実力者を拍手で送り出すジムトレーナーの一人、ツチャは、サカキを尊敬と、困惑の目で見ていた。

☆

その日の深夜、サカキはトキワジムのジムリーダー室に居た。

ポケモン達とその日の対戦を振り返り、それに対する修練を夜遅くまで積んでいたのだ。シャワー室で汗を流し、あとはジムの戸締まりをしつかりと確認してから帰るだけ。

この時間までジムに残っているのは自分ひとりだろうと、サカキは部屋の電気を落と

そうとした。

しかし、「サカキさん」と彼を呼ぶ声があり、扉がノックされる。

サカキがそれに返事をする、扉の向こうにいたのは、トキワジムのジムトレーナーであるツチャだった。

「ああ、ツチャか、どうした？」

サカキは意外な客を笑って迎え入れる。ツチャは真面目一徹なトレーナーで、サカキもその実力をかかっていた。

ツチャは、一歩二歩部屋に入ったが、それ以上は進まない。顔はうつむき、両手の拳は握られ、鼻息が荒く、足はなにかに緊張しているかのように震えていた。

「どうした」と、サカキはもう一度そう問うた。彼のそんな姿を見るのは、はじめてのことだった。

ツチャは大きく深呼吸をすると「サカキさん」と一つ名前を読んでから続ける。

「俺は、もう、あなたのことかわからない」

今にも泣き崩れそうな彼をなだめるようにサカキが肩に置いた手を、彼は払う。

「あなたは、ロケット団のボスだ」

その言葉に、サカキは表情を変えなかつたが、しかし、その心の中には大きな動揺がある。なぜならば、それは紛れもない真実だからだ。

ロケット団、ポケモントレーナーという武力を最大限に活かした暴力組織。数年前からこの世界で名を挙げはじめ、今ではおおよそマフィアというものの存在を語る際に一番に名が出る組織だ。それでいながら、その内情の多くが闇の中にあり、彼等をまとめ上げるボスの素性は、ロケット団の中でも限られた数人しか知らない。

そして、トキワジムリーダーのサカキは、ロケット団のボスとしての顔も有していた。「何を馬鹿な」

しかし、サカキはそれを鼻で笑って否定する。

「どうした、らしくないぞ」

「らしくないのは、あなただ」

サカキの合いの手を、ツチャは振り切った。強い決意が感じられる。

「何を根拠にそう思う」

はぐらかすことを諦めたサカキは、とりあえずそれを問うことにした。

「そんなことは、どうでもいい」

突っぱねるような目つきだった。しかし、サカキは動じない。

「それで、そんな憶測でどうするつもりだ？」

彼は、その疑惑が確信を得ているものではないと高をくくっていた。カントー最難関ジムのリーダーという肩書は、それを考えることすら否定できるほどの威光があること

を彼は理解していたのである。

「俺だって、それを認めたくはなかった。あのロケット団の男が、口からでまかせにホラを吹いたと確信できれば、どれだけ良かったことか。ですが、それならば全ての辻褄があつてしまう」

「まずいな、と、サカキは脳内で焦りを形にした。

秘密主義で構築されているロケット団は、その殆どの団員が、ボスの正体を知らない。だが、限られた数人が、それを知っているのも確かだ。

その僅かな数人のうちの一人が、ツチャ相手に口を割ったと考えれば、ある程度納得がいつてしまう。確かに幹部にはある程度の武力と忠誠を携えたものを選んではいらるが、ツチャほどのトレーナーならば、武力で彼等を上回ることもできるかもしれないし、その結果の前に、忠誠心が揺らぐこともあり得る。

そして、ロケット団幹部からの情報ならば、それを思い過ごしと断言するのは難しいだろう。

「サカキさん」と、ツチャが続ける。

「俺はあなたを尊敬しているし、この世界で最も偉大なトレーナーの一人だと信じている。だから、どうか、あんな連中とは手を切つて欲しい」

彼の目には、涙が浮かんでいた。

はあ、と、サカキはため息をつく、馬鹿が付くほどに真面目な男だ。心の底から道徳を、倫理を尊重している。そんな願いが、叶うはずもないのに。

「なあ、ツチャ。私はそんな連中とは全く関係がない、それこそ誓って言える。チンピラが苦し紛れにいった言葉と、私の言葉、どちらを信用するんだ？」

その言葉に、ツチャは一度ぐつとつばを飲み込んだ。だが、首を振ってそれを否定する。その考えは、その葛藤は、彼の中ではもう燃え尽きた後だった。

「今日まで、俺は誰にもこの事を言っただけはいなかった、あなただけを信じていたからです。ですが、それでも考えを変えないというのなら、俺はこの事を世間に公表します」

「誰も信じやしないさ、誰もな」

「本人が自供すれば、そうはいかないでしょう」

そう言うやいなや、ツチャはベルトに装着しているモンスターボールに手を伸ばした。

サカキは彼の考えをすぐさま読み取り、自分も同じようにモンスターボールを手にする。ツチャは、彼がロケット団の幹部相手にそうしたように、武力を持ってサカキを抑え込もうとしている。

だが、ツチャがボールを放ることは無かった。

代わりに、くぐもったような彼の悲鳴がジムリーダー室に響き、彼は膝から床に突っ

伏す。

サカキは不意に起きた惨劇に驚きながらも、ツチャの首元に食らいついでいるゴルバットに目を取られていた。

そのゴルバットは、ツチャが戦闘態勢を取ろうとした瞬間に開きつばなしのドアから音もなく侵入し、彼の首筋に噛みついた。そしておそらく、自身の持つ猛毒を、ツチャに打ち込んだ。

突つ伏したツチャは、自分を襲撃したモノの正体を確認しつつ、更にそれに対する防御姿勢をとろうと、体を捻って起き上がろうとする。だが、彼が頭の中で思い浮かべていた行動を、彼は出来ない。神経に作用する毒が、彼の肉体と思想を断ち切っている。

やがて彼は自身の肺が全く膨らまないことに気づき、息を吸い込もうと口を開くが、それが出来ないことに絶望し、どう仕様もない胸の痛みと、急激に全身の力が抜けるような感覚を覚える。それが自身の持つ知識の一つである、どくポケモンの毒による作用だとなんとなく感じ始めた頃に、彼の意識は途絶えた。

人を殺したゴルバットは、それになんの動揺も示すことなく、ツチャの背中で待機の姿勢をとった。獲物にかぶりつかないところから、そのゴルバットがトレーナーのポケモンであることは明白だった。

状況を考えれば、次にサカキが襲われてもおかしくはない。だが、彼はそんなことを

微塵も考えてはないなかつた。それは、彼が自身のトレーナーとしての技量に絶対の自信を持っていることが理由ではなく、そのゴルフバットが、自身を襲わないという確信があつたからだ。

「サカキ様」

扉の影から、一人の若者が姿を現した。全身を黒の衣服で固めたその青年は、死体となつた目の前のものに一切動揺することなく、小さく指を振つて、ゴルフバットを自身のモンスターボールに戻す。

その青年は、ロケット団の幹部の一人、サカキも自身の右腕としてその實力をかつていた。頭が良い反面考えが浅く、汚い仕事をこなすことこそが、サカキへの忠誠だと考えている節があつた。

自身に絶対の忠誠を誓っているはずのその青年を、サカキは険しい表情で見つめる。「余計なことを」と、サカキは唇を曲げ、そう吐き捨てた。

その言葉の意味を知りつつも、「しかし」と、その青年は返す。

「危険な男でした。幹部から情報を聞き出し、サカキ様の正体を暴こうとしたばかりか、手をあげようとも」

「つけていたのか」

「はい、幹部の一人がこの男相手に口を割つたと聞いてから」

はあ、と、サカキはため息をつく。日に日にその実力を上げていることは理解していたが、隠密という点でここまでの実力者になつていゝとは思つていなかった。自分でさえ、その気配に気づけなかつたことが、この最悪の状況を招いたのだ。

「誰も信じない」サカキは死体となつたツチャをちらりと視界に入れながら答える。

そう、状況は最悪だ。ジムという、ジムリーダーサカキの縄張りの中で、殺人が起つてしまつた。血なまぐさい事件、ましてやロケット団とは対極にいるはずの自らの縄張りだ。

無関係を装わなければならない、と、彼は考える。この殺人と、自分が結び付けられることは、大きなリスクとなるだろう。

そして、彼は幹部の若者の名前を呼ぶ。

「私の言うことをよく聞くんだ」

☆

それは、真夜中を回ろうかとしている時間帯だつた。

トキワシティの名物居酒屋であるその店の大将は、不意の客に声を跳ね上げる。

「おや、サカキさん。いらつしやい」

大将の声に、まだ店に残っていた数人の客たちは、一斉に入口の方を見て、驚きや喜びなどそれぞれの感情を表現する。ジムリーダーのサカキがこの店を鼻屑にしていると知ってはいたが、いざ目の前にすると、それぞれ思うところがあつた。

サカキは、帽子と外套を店員に手渡しながら、「どうも」と、彼等に会釈した。

「こんな時間に珍しいね」と、大将はカウンターから身を乗り出すようにして言う。

「ちよつと調整がうまく行かなくてね、今日の試合の中で少しまずい動きがあつたんですよ」

「ははあ、大変ですなあ。ささ、こつちに」

大将の目の前の席に招待されたサカキは、いつも自分が頼む酒を注文する。

「静かなのがよけりやあ、出来上がつてる客は帰しますぜ」

そう言つて大将が指さした先には、顔を真赤にさせてまさに酩酊している何人かの客があつた。彼等はそわそわとサカキの様子を窺つていた。大将が睨みを効かせていなければ、すぐにでも絡みたいといった風に。

「いや、構いませんよ」と、サカキは彼等に手を振りながら答える。

「この街におけるジムのあり方について、誰かと話したい気分だつたんです。むしろ、私皆さんの代金を支払いますから、少し付き合つてほしいですね」

サカキの粹な提案に、大将はぱつと表情を明るくし「今日はジムリーダーのおごりだ

「そうだ！」と、店中に響き渡るような声で言う。

客たちはそれに歓声を返し、一人、また一人と好奇心のあるものから順番に、サカキのそばの席へと移動し始めた。

☆

サカキがその店を訪れてから二時間ほどがたった。

客たちは代わる代わるに、サカキと会話をしていた。その途中に必要以上に彼に絡みたがる厄介な客もいたが、店の大将が、彼等を上手くあしらっていた。

サカキは、トキワジムに対する客たちの意見や、それぞれの相談事などに答えていた。トキワシティの住人である客たちは、概ねジムリーダーやジムトレーナー、トキワジムというものに好意的で、中には、カントー最難関のジムがトキワシティに存在することを誇りに思っている住民もいる。

そして、彼が今相手にしている老人の悩みは、孫がトレーナーとして生きることと、決していると言うものだった。ポケモンたちの原生林であるトキワの森を遊び場に育ったその老人にとって、それは考えられないことだった。

「好きなことをやらせれば良いんです、バッジを集めることを急ぐ必要はありません。」

年老いた人物が私に挑戦しに来ることは珍しくありませんし、我々は彼等を特別な目で見ることありませんよ。生まれたその時からトレーナーとして完成している人物もいれば、人生を経験することで完成するトレーナーもいる。戦うことを強要するのは、コロッセオと変わりはありません」

しかしサカキは、その老人よりも、そこにいない孫の肩を持つ。一人の教育者として、サカキにはサカキの考えがあり、アルコールが入っても、それが変わることはない。

サカキの答えが望んだものではなかったのだろう、老人はううむと一つ唸つてから盃を仰いだ。

その言葉で、その老人が考えを変えることはないだろう。だが、彼の孫に対する態度が、少し柔らかくなることは間違いない。

納得していない風の老人に酌をしながら、サカキは腕時計を見やった。

「そろそろ帰りますか？」

酒場の長らしく客の振る舞いに敏感な大将はサカキにそう問うた。

「いや、今日は気分がいいから閉めるまでお邪魔しよう。問題はないだろう？」

「そりゃもちろん。ジムリーダーを追い出すほど商売下手じゃありませんよ」

その言葉に微笑んだサカキに大将は嬉しく思い、滅多に出さない秘蔵の酒を出すことも考えたその時、消防車のサイレンの音が、小さく聞こえた。この賑やかな酒場でも聞

こえるのだから、実際には相当近くに来つつあるだろう。

「こんな真夜中に火事ですか」

そうつぶやく大将に、サカキもその音に気づき、盃を傾けることで、表情がこわばるのを誤魔化す。

客の一人、最も早くサカキに近づいた野次馬根性の強い男が、言葉のようなものを叫びながら居酒屋から出ていった。彼の外套やカバンなどはそのままだったから、ダイナミックな食い逃げというわけではないだろう。

「火の不始末は怖いですからね」と、大将がしみじみと言う。

「うちも気をつけなきゃ」

やがて大きくなり始めたサイレンの音と共に、先程の野次馬男が、居酒屋のドアを力いっぱい開いた。時間帯に似つかわぬ騒音に、大将を含む客たちすべてが、彼に視線を移し、サカキもまた、それが不自然にならないように気を使いながら、彼等に追従する。

野次馬の男は、先程までの真つ赤な顔をどこかに置いてきたかのように、真つ青な顔色をしていた。「サカキさん」と、敬称をつけてサカキを呼ぶことから、酔いもすつかりと冷めているようだった。

「ジムが」

野次馬の男はそれだけ言って、再び外に帰る。

サカキはすぐさま席を立て、彼に続く。察しのいい客たちもそれに続き、大将はそれを確認したい気持ちと店を守らなければならぬ気持ちの中でせめぎあい、やや遅れて彼等に続いた。

彼らが見たのは、真夜中の闇を切り裂くように燃え盛る、トキワジムだった。幸いにも、トキワジムと居酒屋はかなり離れており、自分たちに被害が出ることはなさそうだった。

彼等は皆、サカキの方を見た。燃え盛るジムの主を見た。

サカキは目を見開いて驚いていたが、やがて一つため息を吐いて言う。

「良かった、誰もいないときでよかった」

それを聞き、客たちはサカキに対して崇拜に近いような感情を覚えた。自らの城であるジムが燃え盛っているこの状況で、自分以外の誰かのことを気にかけることができると精神力に、皆感服していた。

当然、それはサカキの演出の一つだった。一つ、ポツリとそうつぶやくことで、今、ジムには誰もいないはずだと言うことを、誰でもないサカキ自身が信じていることを皆に印象付けるための演出。

そして、もし火災の現場から誰かの死体が出てきても、それがサカキの想像の外であ

るということを、彼等は疑ってはいなかった。

☆

真夜中と言つていい時間も後半になろうとし、海中の生物たちが活気よく動こうとしていた頃。

ロケット団幹部の青年は、二十一番水道を、部下の手持ちであるラプラスに乗つて南下していた。それもすべて、ボスであるサカキの指示である。

二時間後にジムに火を放ち、ナナシマ諸島のアジトに身を隠せ、それがサカキの指示だった。

それは、青年が思う限り最良の選択だった。本土から遠く離れたナナシマのアジトは、そもそもその存在すらも知られてはいない、身を隠すにはうってつけ。

そして、身寄りもなく、ジムトレーナーのような表の顔のない自分が消えたところで、誰もそれを気にしはしないし、怪しまれもしない。自身をロケット団に追いやつた社会と言う人格の彼への無関心が、ここに来て、彼に有利に働いた。

これなら、ジムの遺体とサカキとの間に線が引かれることはない、ケチな物取りが、大胆にもジムに忍び込み、出会させたトレーナーを殺した後に、証拠隠滅をはかるために

火を放った。当然それで証拠や遺体が消せるわけではないが、そのずさんも、聡明なジムリーダーの対極の存在として考えられるだろう。

青年は、懐からセカンドバッグを取り出した。中には、ジムの中にあつたほとんど全ての、物取りが盗みそうな物品が詰め込まれており、結構な重量だった。

しかし、青年はそれを惜しむことなく海に放り投げる。割と大きな音が響き、闇の中には波紋が広がっているだろうが、ラプラスの進みが、それから遠ざかる。

チンケな稼ぎだ、と、青年はため息を吐いた。ジムリーダー、社会的には大物かもしれないが、その本拠地にあつた物品のなんと貧相なことか。サカキの裏の顔が動かしているものを知っている青年は、そのギャップに軽い笑いすら覚える。

彼のような男を失脚させようとすることは、つまるところ社会の損失なのだ、と、青年は考える。

だから当然、あの男が命を絶たれたのは、この社会を維持するために必要な犠牲だったのだ。

不意な水音に、まさか偉大な幹部が海に落ちたのかと彼を確認したつばは、彼が詮索を嫌う性格だということを理解しながら、こんな真夜中に仕事をさせられていることとのささやかな報酬位いいではないかという気持ちで、彼の暗号名を呼ぶ。

「アポロさん、一体何があつたんですか？」

「なに、大したことはない。ゴミを掃除しただけだ」

振り返らずに答えられたその言葉に、したっぱはその含むものを想像し、身を震わせて、これ以上の詮索をやめた。

青年は、それを後悔してはいなかった。唯一しまったと思っっていることは、その殺人を、衝動的にサカキのテリトリーで行ってしまったこと。殺人という行為そのものにはなんの躊躇もなく、何度過去を繰り返しても、どの次元でも、自分はそれをしていただろうと想像していた。

2. 登場

午前八時十二分、タナーリ国際空港、カントー地方と世界とを結ぶ玄関口となっているその空港には、世界中の利用者が集まる。

ロサンゼルスからの直行便は、十時間以上のフライトで、乗客の負担も大きかったが、天候がよく、更にパイロットの質も良かったのだらうか、乗客たちはそれぞれ満足げな表情をしながら、スーツケースや大きな荷物を手に関税チェックと入国手続きの順番を待っている。

彼等の殆どは、一刻も早くカントーに足を踏み入れたかった。カントーと言えば、ジムシステムをいち早く導入し、質の高いトレーナーを数多く有する世界でも有数のポケモン文化圏だった。

ロサンゼルスからの乗客たちは、期待を胸に律儀に列に並んでいたが、その中に一人、明らかにその列を乱しながら、右往左往している男がいた。

その男は、とてもパスポートを有する旅行者には見えなかった。頭はボサボサ、薄汚れてよれよれのレインコートを着た中年の男で、首から小さな黒のカバンを下げている。

更にその男は、キョロキョロと周りを見回して、赤いスーツケースを持っている女性を見つめるや否や、のそのそと近づいていき声をかける。

「あのう……すみません、奥さん。ちょっとばかし、そのスーツケースを確認させてもらえませんか？ あたしスーツケースを無くしちゃいましたね……いや、ホントはカミさんの……だから女物なんですよ」

女性の返答を聞く気もないのだろう、男は屈んでそのスーツケースを物色する。

「あ、こりやどうもすみません奥さん、これは違うようですね……あたしのは取っ手がグラグラしてるんで……しかもよく見たらこりや新品みたいですねあ、カミさんのはもう傷だらけですから……長く使ってますからねえ」

訝しげな視線を投げかける女性に臆することなく、男は挨拶もそこそこに、再び物色を再開する。

警備員の男は、男をつまみ出すかどうかを真剣に考えていた、状況から察するに彼がロサンゼルスからの乗客であることは間違いないのだが、風貌から察するに彼が限りなくホームレスに等しい存在だということも間違いなかったからだ。

経験上、その警備員の男はそんなことがありうることを知っていた。こそ泥や置き引き犯が乗客のふりをしてカモの物色をすることは無くはない。

運が悪い、ということはあるものだ、よりもよってこんな日に。

警備員の男は、その中年男と同じく周りを見回しながら右往左往している女性を見ながら思った。しかし彼が彼女に対して警戒を持つことはない。なぜならばその女性は、青を基調とした制服に身を包み、黄色の星印がついた帽子をかぶっている。つまり彼女は警察官、ジュンサーだった。

彼女が誰を探しているのか、警備員は知っていた。だからこそ話がややこしい。

その便には、ロサンゼルス市警きつての腕利き刑事が乗っているはずだった。なんでも警察間交流の一環で研修に来るらしい。

ロサンゼルス市警の腕利きとなれば、幾多もの修羅場をくぐり抜けた犯罪のエキスパートに違いない。まさかその前でこそ泥に逃げられる醜態をさらす訳にはいかないだろう。

警備員がその男の処遇について悩んでいるその間にも、その男は鮑漁りをやめない。「ちよいとすいません、そのスーツケース確認させてはもらえませんか……あ、よく見りやこれ、オレンジ色ですなあ」

ついに警備員は騒ぎを起こす覚悟を決めた、生唾を飲み込んでから、男のもとに歩み寄る、彼女を追うようにその男に向かっていた、念のためにと、腰のベルトにセットしているモンスターボールに手をやりながら。

「なにかお困りですか？」

妙に粉つばいレインコートに手をかけながら、警備員がその男に声をかける。

「ああ、実はスーツケースを無くしちまいますて、別にあたしのものがなくなるのは良いんですがね、あのスーツケースはカミさんが気に入ってる品で、無くしちまうと怒られるんだ」

「預り証を拜見させてもらっても？」

男はその言葉に困ったように表情を歪ませる。

「いや……実は無くしちまってね……まったく参ったもんですよ、あたしやロンドンでも似たようなことやって……」

「では、パスポートを」

「ああ、そうだ。ロンドンでもそんな話になりました。貴重品はこのカバンに入れることにしてるんで」

そそくさと妙に手慣れた動きで首からかけたバッグから取り出されたパスポートの中身を確認し、思わず声を上げそうになるほどにぎよつとして、パチパチとまばたきをして再びそれを確認したのちに、目線を上げてジュンサーを探した。

キョロキョロしていたジュンサーは、すぐにその警備員の視線に気づき、ぱつと表情を明るくさせて近づいてくる。このパスポートが本物だったとしても、はたまたこそ泥にさられた盗品であろうと、どっちみち彼女の管轄だ。

警備員に近づいたジュンサーは、その中年男に話しかける。

「コロンボ警部！ お待ちしておりました！」

コロンボ、と呼ばれたその中年男は、頭をかきながら彼女に振り返った。

「はあ……」

その表情を確認し、ジュンサーは大げさなほどにピシッと敬礼して挨拶する。

「私はジュンサーです！ 部長命令でお迎えに上がりました！ コロンボ警部！、長旅お疲れ様でした！」

「ああ、あなた警察の人……いや申し訳ないんだけどね、あたしスーツケースを失くしちゃって……もう少し待ってもらえないかな」

警備員は、彼等のやり取りを信じられないと言った表情で眺めていた。本当にこの男がロサンゼルス市警きつての敏腕刑事なのだろうか。自分のスーツケースさえまとも探すことができないこの男が。

しかしジュンサーは、彼がコロンボであり、ロサンゼルス市警きつての敏腕刑事であるということ疑ってはいないようだった。良く言えば人を外見で判断しない、悪く言えば少し抜けていると言ったところだろうか。

「それは我々カントー警察局にお任せください！ 必ず見つけます！」

「ああ、そう……たのもしいな」

コロンボは彼女に少しはにかむと、今度は警備員の方を見て「そういうことなんで……」と言う。

警備員はやはりまだ懐疑的な視線をコロンボに向けていたが、それ以上自分が語るこ
とがないことになんとなくホツと思つた。

タナーリ国際空港からカントー地方へと続く道路を、ジュンサーが運転する小型自動
車が走っていた。

助手席のコロンボは窓から見える風景を「ほう」とか「へえ」とか言いながら眺めて
いる。

「カメラをカバンに入れちまつてたんですよ」と、コロンボは椅子に座り直しながら呟
く。

「まあ、カメラを持っていたとしても、寄り道はできなさそうだけどね」

コロンボの言葉に、ジュンサーが「どうしてそう思われますか？」と、少し驚いた表
情で問う。

コロンボは再び流れる景色に気を取られながら答える。

「気を悪くしないでくださいね……出迎えが巡査一人つてのは少しさみしいもんがあ
る。なにか大きな事件が起きて、あたしにまで手を回せないと言つたところなんでしょ

う？」

「素晴らしい！」と、ジュンサーは興奮に頬を赤くしてそう叫んだ。

「さすがはコロンボ警部！ 今少し大きな騒動が起きていて、失礼ながら一巡査である私が、数日ではありますがコロンボ警部の視察のご案内をすることになりました！ ロサンゼルス市警きつての腕利きとの評判のコロンボ警部から、私もいろいろと学びたい所存であります！」

コロンボは額を掻いた、そのような全力の称賛をここまで間近に聞いたのは久々のこととで、思わず照れてしまったのだ。

「研修と言っても、二週間程度のもですよ……ちよつと長い旅行と変わりやしない。だけど、ロサンゼルスじゃあまず間違いなくポケモンを見ることはないから、ぜひとも見てみたいもんですなあ。カミさんがね、あのピカチュウとかいうポケモンが好きで……ああ、そうだ、写真を撮ってこいと言われていたのに、カメラが無いんだ」

カントーと言えば、不思議な生物であるポケモン文化圏として有名だ。

「私がお用意しましょう」と、ジュンサーが言う。

「素晴らしいものではありませんが、どちらもなんとかなります」

「そりゃありがたいですけど……カメラはともかくピカチュウとなると難しいでしょう」

「いえ、ピカチュウは私が持っていますから、それを撮ればよろしいかと」

へえ、と、コロンボが感嘆する。

「それはつまりあれですか。ボールに仕舞っているとかいう」

「はい！ 外に出るときにはボールの中に入れて一緒に移動しています」

「ひゃあ、たまげたねえ……カントーの警察官は優秀なトレーナーでもあるとは聞いてはいたけど、君のような子までそうだとは思わなかったよ。あたしも犬飼ってるけどね……これが全然言うことを聞かないんだ」

「いえ、私はトレーナーとしては未熟なもので、バッジも二つしか持っていませんし……」

「バッジ？」

コロンボの疑問形に、ジュンサーはハツとして、彼がカントーのシステムについて知らない人間であることを思い出した。

「失礼しました。カントーには八つのジムが存在していて、認定されるとバッジをいただくことができます。もちろんその数が多ければ多いほどトレーナーとしての実力も上だということで、私の二つというのは正直、あまり優れているというわけではありません」

少し落ち込んだ風な彼女に、コロンボは励ますように言う。

「あたしも射撃の腕が壊滅的だね、ここだけの話、いつも代役にやってもらってるんだ。もう何年も撃っていないから、弾の入れ替え方すらも怪しい」

ふふ、とコロンボが笑うのに、ジュンサーも「ありがとうございます」と、礼を言った。

しばらく車内の中を沈黙が流れたが、パトカーが交通量の多い道路から少し逸れたあたりでコロンボが問う。

「ところで、どんな騒ぎが起こってるの？」

ジュンサーは軽快に答える。それは本来関係者以外には漏らしてはいけない事案だったが、彼女はコロンボを信頼しきっていた。

「はい、実は先程言ったジムで火事が起きまして、しかも現場からは遺体が……」

「放火殺人！」

コロンボは額に手を当て天を仰ぎながらつぶやく。

「いえ、まだそうと決まったわけではありませんが……状況から考えると……」

「どこに行っても血なまぐさい事件は起こるもんですなあ、ロンドンに行ったときもメキシコに行ったときにも殺人事件があつて……やれんもんですなあ」

「ええ、しかも被害にあつたのがトキワジムなので、近年では最も大きい事件になるかもしれせん」

「トキワジムというと?」

「八つ目のバッジを管理する、カントーの中で最も位の高いジムです。実力者揃いのジムで、ジムリーダーのサカキさんも世界的に有名な——」

「サカキだつて!?!」

ジュンサーの言葉を遮って、コロンボが叫ぶ。

「サカキさんつて、あのバカでかいポケモンを使うあのサカキさん? なんかのテレビで見たことがある」

「ええ、おそらくはそのサカキさんで間違いないかと」

「はあなるほど……そりゃあ警察も全力をつくさなきゃなりませんなあ」

「全くです」と、ジュンサーは答えた。

3. 推理

朝、と言つていい時間だった。

トキワシティ、トキワジムの周りは、不意に現れた非日常に興奮しながら、なんとか自分もそれを享受したいという気持ちでいっぱい野次馬でゴつた返していた。

町の誇りであつたトキワジムは、すっかりと景観を変えてしまつてゐる。壁は焦げ、窓ガラスが割れ、外から中を確認できてしまう部分すらあつた。

彼ら野次馬、または仕事熱心なマスコミ関係者などは、一秒でも早くジム内に入つてしまいたいと考えてはいたが、ジムを囲うように張り巡らされた黄色のテープがそれを防いでいる。すでにその現場は警察の監視下に置かれている。

それは、それがただの火事ではない事を間接的に彼等に表現していた。パトカーに並ぶ救急車の存在も、彼等の好奇心を掻き立てる。

しかし、その中でも善良な市民の一人は、ジムリーダーであるサカキの安否を心配していた。流石にそんなことはありえないだろうと思ひながらも、その救急車で運ばれたのがサカキではないという確証はなかつた。

カントー警察局のケージは、半焼したトキワジム、ジムリーダー室の中で、冷静さを取り戻そうと努力していた。

全焼、というわけではない、トキワシティの消防局の懸命な努力により、現場は半焼にとどまっている。

だが、それよりも問題なのはこれだ、と、ケージは足元に転がる死体をちらりと見やつて唸った。

大事件、と言っているいい案件だった。カントーの中でも指折りの格を持つトキワジムを襲撃、ジムトレーナーに手を出した挙げ句に放火など、あまりにも大それている。

トキワジムリーダーのサカキは、警察とも関係の深い人物だった。ポケモンの強さに対するその見識の深さは、カントー地方でも有数のものであり、一時期は警察官のポケモンバトルを指導していたこともある。警察のメンツを保つためにも、必ず解決しなければならぬ。

ジムの周りには、数多くのマスコミ関係者と、それを遥かに超える野次馬がひしめいている、これだけの事件だ、世間の関心も当然高い。

現場の状況を再度確認しようと、ケージは鑑識の人間を探した。その時、彼は警察関係者の中に、一人、見慣れぬ不審な男が紛れていることに気づいた。ヨレヨレのボロ布のようなレインコートを羽織ったその中年男は、さもそれが当たり前のようにあるき回

り、しげしげと現場を眺めている。

ケージは今ここにいる警察関係者すべての容姿を把握しているわけではないが、そのヨレヨレの男がそれではないことくらいは容易に理解が出来た。

大方スクープの欲しい記者が、食い詰め者を安く雇って詮索させているのだろうと彼は判断し、身近にいた警察官に、その男をつまみ出すように指示しようとした。

だがその時、「コロンボ警部！」と叫ぶ声と共に、空港に送つたはずのジュンサーが警官達の間をなんとかすり抜けながら現れた。中年男もまた、彼女に視線を送る。

ロンドン市警から研修に来る刑事の世話役を頼んだジュンサー、コロンボと呼ばれた事件現場に妙に慣れている中年男、聡明なケージは、その男の風貌に多少動揺しつつも、その状況について理解した。

だが、だからといってそれが認められるわけではない、たとえその男がロンドン市警の刑事であろうと、カントーの殺人現場になんの許可もなく入って良いわけがない。

「何をしている！」と、ケージはジュンサーを一喝した。現場は一瞬静まり、彼女は恐れていたその声に体を跳ね上げて背筋を伸ばす。一方コロンボは、のそりと振り向いてジュンサーとケージを交互に見やった。

「現場に部外者を入れるなど！」

ケージは直立不動のジュンサーを叱責するが、やはりのそりと、コロンボが割って入

る。

「ああ、すみません。あたしがどうしても現場を見たいとわがままを言ったんです……どうか彼女を怒らんでやってください。あたしロス警察のコロンボです」

差し出された右手を、ケージはひとまず握る。思いの外強い力に彼は驚いた。

「カントー警察局長刑事部長のケージです。コロンボ警部、見ての通りの状況で、あなたに手を回せなかつたことは申し訳なく思っています、突然このようなことをされると」「いや本当に申し訳ない、出過ぎた真似でした、今すぐに失礼しますから……」

そう言つてその場を後にしようとしたコロンボを、ケージは引き止める。コロンボの振る舞いが敬意にかけていることは間違ひなかつたが、その男はロサンゼルスからの客人でもある。

「いや何、私もカツとなりすぎたようです。どうでしょう、一つ警部の見解をお伺いしたい」

「あたしの見解を？」

「ええ、見ての通りこの事件は強盗放火殺人で間違ひはありませんが、事件が事件ですのでも一つでも多くの考えが欲しい」

ケージはぐるりと焼け焦げた室内を見回す。室内が荒らされ、かろうじて形を保っている長機の引き出しは全て引き抜かれていた。

「正確な被害はまだ判明してないが、グリーンバッジが見当たらないところを見ると、犯人はそれを狙った可能性が高い」

「バッジを？」

「闇に流すんです」

コロンボの疑問には、ジュンサーが答えた。

「カントー最難関ジムのグリーンバッジは、持っているだけでトップクラスのトレーナーであることの証になります。それだけに、表沙汰にされない市場では非常に高価でやり取りされているんです」

「しっかりと調べれば正規ルートで手に入れたものではないことはわかるんだが、なかなかそこまですることはない」

「はあ、なるほどねえ。そこで被害者と鉢合わせて、殺したと」

コロンボは額を掻いて少し唸った後に、懐から葉巻を取り出した。

「あの、葉巻、よござんすか？」

「ああ、構わないよ、現場検証はもう終わっている」

コロンボはそれを啜えた後にレインコートのポケットを探った。更にその後レインコートをバサバサと揺らし、情けない声でジュンサーに話しかける。

「君、マッチ持ってない？」

首を横に振ったジュンサーに、コロンボは今度はちらりとケージの方を見る。

「すみません……火、あります?」

ケージは半ば呆れながら、ポケットからライターを取り出してコロンボに手渡した。果たして本当にこの男がロサンゼルス市警きつての敏腕刑事なのだろうか、とてもそうは思えない、それどころか、刑事であることから疑わなければならぬような気すらする。

コロンボはそれで葉巻に火をつけると、全くの無意識にそれをレインコートのポケットにしまう。「あ」というジュンサーの声と、ケージのこれみよがしな咳払いさえなければ、それはそのままロサンゼルスに向かっていただろう。

「あ、すみませんね」

特に悪びれる風もなくケージにライターを返したコロンボは、今度は葉巻を持った手で額を掻いきながら、白い布を書けられた死体を見る。

「死因は何なんです?」

「まだ正確な報告があるわけではないが、ゴルバットの『どくどくのキバ』によるものではないかと考えられている。おそらく、死ぬまでにそう時間はかからなかったはずだ」

「ゴルバット?」

再びコロンボの疑問にジュンサーが答える。

「ポケモンです、コウモリのような」

「はあ、なるほど、ポケモンによる殺人ですか……」

「滅多に起こるものではない」

「あたしも昔犬を使った殺人を担当したことがありますてねえ……しかし、噛まれたくらいですぐに死ぬってことはないでしょう？」

「ゴルフバットはどくを使うことのできるポケモンで、おそらくはその毒を注入されたと思われれます」

再びのジュンサーに、ケージはじろりと彼女を睨む。聡明な彼女はその理由をすぐに理解し「失礼しました」と、一歩下がった。

「ある意味拳銃よりも厄介でしょうなあ、被害者はポケモンを持っていなかっただけ？」
「いや、三体ほど所持していた。だが、彼等は皆ボールの中に取り残され、火事による酸欠で全て死んでいる。多少のダメージならば回復させることができるが、根本から死んでしまうとな」

「ポケモンを持っていた……？」

コロンボが葉巻をくゆらせながら呟く。

「つまり被害者もトレーナーだったということですか？」

「さよう、被害者のツチャ氏はトキワジムでジムリーダーの補佐をするトレーナーだっ

た」

コロンボはさらに疑問を続ける。

「トキワジムというのはカントー中で最も格の高いジムの一つなんでしょう？ 実力も

高いはずだ」

「当然、ツチャ氏はカントー全体で見てもかなり上位のトレーナーだ」

「だったらおかしいでしょう。どうしてそれほどの実力者が、全くの無抵抗でやられるのか、拘束された痕はないんでしょう？」

コロンボの指摘に、ジュンサーははつとした表情を見せ、ケージは押し黙った。確かにその意見は、的を射ているのだ。

「確かに、少し妙な状況ではある」

ケージは少し考え、現場の状況を思い出しながらそれに答える。

「不意を打たれたとすれば、辻褄が合う。事実、ツチャ氏はここにうつ伏せに倒れており、ゴルフバットのキバの痕も、背後からつけられたものだった」

「うつ伏せに？」

コロンボはまたもやつぶやきながら腰を落とし、死体を覆っている布を剥ぎ取る。それは確かにうつ伏せで、足は扉に、両手は長机の方に向かっていた。

立ち上がりながら、彼は再び額を搔く。

「そりゃあおかしいでしょう、まるで逆だ」

その言葉に、ケージは若干の不快感を覚えはしたものの、「逆、とは？」と、冷静に問う。

「いやね、もし犯人が『仕事』をしている最中に被害者と鉢合わせ、口封じのために殺したのなら、普通は正面から攻撃を仕掛けて、被害者は仰向けに倒れるでしょう？　なのに被害者は背後から襲われて、うつ伏せに倒れてる」

あの、と、ケージの方を恐る恐る見ながらジュンサーが手を挙げる。

「背を向けて、逃げようとした、とは考えられないでしょうか？」

いやあ、と、コロンボは首を横に振る。

「だとすると、この死体の位置がおかしい。逃げようとする時にわざわざ出口から離れたところに行こうとはしないでしょう」

ううむ、と、ケージは唸った。そして、目の前の冴えない中年の男が、ロサンゼルス市警きつての腕利きと評判であるということをやくやく思い出し、認識を改める。

「コロンボ警部は、どのようにお考えで？」

「これはあたしの第一感ですがね」と、コロンボは煙を吐いて一拍おいてから答える。

「物取りが被害者と鉢合わせて、って線は無いと考えてます。この状況を考えると、どう考えてもこの部屋に最初にいたのは被害者の方だ、犯人じゃない」

「ツチャ氏はこのジムの関係者だ、ジムリーダー室にいても不思議ではない」

「あたしやロサンゼルス一の空き巣と話したことがありますかね、彼等は人並み以上に臆病なんだ。狙った場所にまだ人がいるとわかれば諦めて帰りますよ」

「ということとは」と、ケージが少し大きな声で呟く。

「犯人の目的は最初から殺人だったと！」

「ええ……あたしはそう考えています」

あの、と、ここで再びジュンサーが手を挙げる。

「犯人が二人組だった。ということは考えられないでしょうか？」

ジュンサーの考えに、ケージははつとした。確かにそれならば、物取りの犯行だとしても辻褃が合うのだ。

「そうだ！ 確かに二人組ならば説明がつく、この部屋を物色していた一人目をツチャ氏が発見し、そのスキに二人目が後ろから」

いやあ、と、コロンボが首をひねる。

「確かにそう考えることも出来ます……ですがやはりポケモンを出していない、無抵抗であったということが引つかりますなあ。あたしどうしてもね、こういう小さなことが気になって仕方がないですよ」

ああ、そうだ、と、コロンボは続ける。

「被害者の金は取られてたんですか？」

「わからないが、財布は持っていない」

ふうん、と、コロンボは再び腰をかがめ、死体と床の隙間に手をつ突っ込んで胸元を探る。そして彼は、手のひらにいくつかの感触を感じた。

「何かありますよ」

それを聞き、ケージも同じく腰を落として、コロンボと同じ箇所を探る。手のひらの感触に、ケージは覚えがあった。

「バッジだ」

ケージは近くにいた警察官を呼びつけ、二人で死体を仰向けに裏返す。そして死体のジャケットをめくると、そこにはトレーナーのあこがれである八つのきらめきがあった。

「それ、バッジでしょう？」と、コロンボが葉巻の手で指差す。

「ああ」と、ケージは神妙な顔で呟いた。

「妙だな、グリーンバッジを盗難しているのに目の前に転がっているバッジは無視している」

「殺人に動揺してしまったとか……死体を触るのが怖かったか」

彼等を覗き込んでそう予測したジュンサーに、ケージは首を振る。

「無くはないが、少し弱いな。犯人は殺しをやった上に放火までするような奴らだ、今更そんなことを躊躇するとは考えにくい。予想外の殺人に足がすくんですぐさま逃走したとも考えられるかもしれないが、そうするとわざわざ火を放つ余裕がわからない。普通の感覚ではないからこんな事をすると言えばそれだけだが……」

三人はしばらく沈黙していたが、やがてコロンボが口を開く。

「この施設の責任者は今どこにいらつしやるんで？」

ケージはそれに答える。

「ジムリーダーのサカキさんは今自宅に待機してもらっている。これから私が話を聞きに行くところだ」

コロンボは葉巻を挟んだ手を上げて言う。

「それ、あたしもついて行っていいですかね……いやあ、野次馬根性と言ってしまったえばそれまでですが、ウチのカミさんがいつかテレビ番組で見た時にえらく気に入って、本物と会ったと自慢してやりたいんです」

にへら、と笑うコロンボにケージは一瞬間をしかめたが「まあ、構わないでしょう」と、それを了承した。

4. 遭遇

自宅にて、トキワジムリーダーサカキは一つ息を吐いて状況を整理していた。今の所、全ては彼の思い通りに進んでいる。

彼は燃え盛るトキワジムを目撃し、責任者として当然トキワジムに向かった、そして消防隊員に自宅に待機するように命じられ、それからずっとここにいる。

まだ自分は、火災現場から死体が見つかったことを知らないはずだ。そして、おそらくこれからそれを知ることとなる。その時には、ある程度うろたえたほうがいいだろう、自らの管理不足によつて教え子の一人が死んでしまったことに対する責任を、重く感じなければならぬ。

それ以前に、警察が自分を訪ねてきたことにまずは驚くべきだろう。まだ自分は、それがただの火災ではないことを知らないはずなのだから。

幸いなことに、警察の人間の殆どは自分と顔なじみだった。彼らの中に自分を強く疑う人間などいないだろうし、仮に居たとしても、それは多数の否定派によつて潰されるはずだ。

つながるはずがない、あのとき自分がトキワジムに居て、殺人を目撃し、更にはその

殺人に大きく関係していることにつながるはずがない。

サカキにはほくそ笑みながら、呼び鈴の音を聞いた。

「いやあ、あなたがサカキさんですか、ウチのカミさんが一度あなたをテレビで拝見してからファンになっちゃいました……」

そう言つて握手を求めてくる中年男に、サカキは複雑な表情を浮かべながら対応する。

サカキの思い通り、訪れた刑事のうちの一人は顔なじみのケージだった、だがもう一人のこの中年男が誰なのかさっぱりわからない、ケージが何も言わないところから浮浪者や一般人というわけではないだろうが、彼の薄汚れたレインコートは、むしろそうではないという違和感をサカキに与えていた。

「ケージさん、彼は」

ケージが一つ咳払いをしてからそれに答える。

「彼はロサンゼルス市警のコロンボ警部です。我がカントー警察局の捜査技術を学ぶために研修にいらしたのです」

そう言われて、サカキは再びコロンボを見やる。だがどうやっても、目の前のこの冴えない中年男が刑事事だとは思えない、ロサンゼルスという都市はそんなにも人手不足な

のだろうか。

「いやあしかし……素晴らしいお屋敷ですなあ。特にあのプールはすごい。あたいスポーツクラブでしかあんなの見たことありませんよ」

コロンボはぐるりと玄関を見回しながら言った。その言葉はお世辞でも何でも無くコロンボの本心であり、また実際に、サカキの自宅は、トキワシティで最も広大な、と言つてもいいくらいの出来であった。

「独り者には広すぎるくらいですよ」

サカキはコロンボを取るに足らない男だと判断したのか、朗らかにそう答える。

「最も、ポケモン達に不自由ない暮らしをさせるには、少し不満もありますが」

コロンボはその言葉にニヤリとする。

「わかりますよ、うちも犬飼つてますがね。ちょっと目を離したらあつちへゴソゴソこつちへゴソゴソで……」

サカキはそれに軽い笑みの相槌を打ち、軽く非難の目線をケージに向けながら問う。

「ある程度状況を理解しているつもりではありますが、どうして警察の方が私を訪ねに？」

その問いに、ケージは表情を変え、うつむきたくなる衝動をなんとかこらえながら言う。

「実は、火災現場から死体が見つかりました。まだ正確な判断はできませんが、おそらくは、ジムトレーナーのツチャヤ氏ではないかと……」

「死体……」と、サカキはまずそう呟いた。そして、彼は考えをまとめるように額に手をやった後に「なんてことだ……」と、更に呟く。

「どうして、私は確かに誰も居ないことを確認してから戸締まりを……」

「申し訳ありませんが、ジムを後にした時間を正確に覚えていますか？」

ケージの質問に、サカキは首をひねりながら答える。

「正確かと言われると自信がありませんが、そろそろ帰ろうかと準備を始めたのは深夜の十二時を回った頃です。時計を見て、流星に根を詰めすぎたと我に返ったのを覚えています」

その言葉に「何かあったんですか？」と、コロンボが反応する。

サカキは滞りなくそれに答えた。

「昼間に挑戦者相手のジム戦を行いまして、その中で、少し私にまずい動きがあったので、その修正と反省をね」

「はあなるほど、仕事熱心ですなあ」

おほん、と、ケージが咳払いする。

「その時に、あなた以外にジムに人は居なかったと」

「ええ、一応確認してから戸締まりするようにしていますから。ただ更衣室やトイレを一つづつ開けて確認するわけじゃなく、声を掛ける程度のものでした」

うーん、と、ケージは唸るように鼻を鳴らす。

「そうするとつまり、例えば悪意のある人間がわざとあなたをやり過ごそうとすれば出来たかもしれないということでしょう」

「そんなことはない、と言いたいところですが、如何せん前例がないので何とも、ただ少なくともこれまではそんな事はありませんでした」

その時、コロンボが「あ」と声を漏らした。見れば、コロンボは左手にメモを持って、棒立ちになっている。

「すみません、ペンを忘れちゃいました……おかしいな、確かにここに入れたんだが」

パタパタとレインコートをはためかすコロンボにケージはため息を吐いた。一体この男は、何なら持っているというのか。

似たようなことをサカキも思っていたのだろうが、しかし彼はそれに対する不快感をこれっぽっちも感じさせずに「これを」と、内ポケットからボールペンを取り出して、コロンボに手渡した。

「ああ、こりやどうも、へえ、こりやあ立派なペンですなあ、素晴らしく書きやすい」

コロンボはサラサラと何かをメモに書きなぐって笑った。

「火事の原因に、なにか心当たりは」と、ケージが質問を再開する。

サカキは首を振ってからそれに答える。

「全くありません、私はタバコは吸いませんし、ジムトレーナーにもいなかった。火元はどこなんですか？」

「ジムリーダー室です」

「私の部屋……やっぱり全く見当がつかない、あそこに火元らしい火元はないはずですよ」

「なるほど」と、ケージはメモを取る。

「となると、やはり放火の線で間違いないようですね」

「放火、と、ケージの言葉を一つ復唱して、サカキは首を振る。
「申し訳ありません、少し頭が混乱して……ツチヤが犠牲になっている上に放火だなんて。もう何がなんだか、もしよろしければ、もう少し詳細な情報を聞かせてもらいませんか」

サカキは、うろたえる風を装って、今警察がどのようなことを考えているか聞き出すとしていた。

その策略を知る由もなく「わかりました」と、ケージは頷く。

「消火後、火元であるジムリーダー室からはツチヤ氏の死体が見つかりました。死因はゴルバットの『どくどくのキバ』による毒殺。おそらく即死だったでしょう」

「なんて恐ろしい」と、サカキは呟く。それは決してオーバーなりアクションなどではなく、ポケモンを使つて人間に攻撃するという行為の倫理性の無さは、ポケモントレーナーならば誰もが恐れる。

「ジムリーダー室は荒らされ、金目のものはおおよそすべて無くなっていました。後日、正式な盗品リストを作つていただくことになるとは思いますが……あの部屋にはグリーンバッジが？」

「ありました」と、サカキはそれに答えた後に「紛失していたということですか」と続ける。

「さよう、物取りの卑劣な犯行であることは明白です。我らカントー警察局の威信にかけても、必ず犯人を捕まえ、然るべき罰を与えます」

力強くそう言い切るケージに相反するように、サカキは弱々しく呟く。

「私の責任だ……ジムを放火されるどころか、バッジを失い、ジムトレーナーを死なせてしまうなど」

ケージは憔悴しきつているサカキの背中に手を回すと、励ましの声を掛ける。

「決してあなたの責任などでは……ジムを襲いジムトレーナーを殺害するなんて前代未聞です」

この辺にしておきましょう、と、ケージはサカキに背を向けて、その場を後にしよう

とする。彼はサカキの憔悴っぷりから、より詳しい話は先にしたほうがいいと判断した。

コロンボもケージと同じようにそこを後にしようとしたが、ふと顔を上げて「すみません、あと一つだけ」と、指を立てる。

「火事があつた時、サカキさんはどこに？」

サカキはちらりとコロンボをみやつて答えた。

「酒場にいました」

「酒場に？ 火事が起きたのはずいぶんな真夜中ですよ」

「少し飲みたい気分だったんですよ、そこで盛り上がってしまいましたね」

それはなんの問題もない行為だった。彼はその時ツチャが死んでいることなんか知らなかったし、ジムが火事になることも知らなかったはずなのだから。

「なるほど、ありがとうございます。どうか気を落とさず……」

二人の刑事は挨拶すると扉を締めながら玄関を後にした。

残されたサカキはふう、と一つ息を吐いてから深呼吸する。

概ね、彼が思っていたとおりの展開になつているといつてよかつた。警察は物取りの犯行だと信じて疑つてはいないようだし、自分には疑惑のかけらも持たれてはいない。

思わず笑みがこぼれてしまいそうになるのをサカキがこらえたその時、不躰に玄関の

扉が開かれ、コロンボが姿を見せた。

サカキは一瞬表情の変化を捉えられてしまったかと焦ったが、コロンボの表情から察するにそれは無さそうだった。

「すみません、ペンを借りたままでした」

差し出されたボールペンを、サカキは「どうも」と、言いながら受け取った。この時、サカキはこの中年男に妙な違和感を覚えた。自らを見る藪眺みのその目が、彼が纏う雰囲気とは別に、とても鋭く自身を指しているような感覚だった。

更にコロンボは「ああ、あともう一つ」と、一歩サカキに踏み出す。

「あたしポケモンのことは全くの門外漢で、一つご教授願いたいんですがね。カントーで最も格の高いジムリーダー、あなた以上にポケモンに詳しい人間なんてそうはいないでしょうからなあ」

サカキは妙な胸騒ぎを覚えながら「私に答えられるものであれば何でも」と、答える。「ありがとうございます。あたしさつきからずつとわかった風に聞いていたんですがね『どくどくのキバ』というのは一体どんな技なんですか?」

『どくどくのキバ』とはつまり、技の一つです、噛み傷から特殊な猛毒を体内に注入する大技で、この毒はある程度毒に耐性のあるポケモンすら蝕む猛毒です。人間にうてばかなり危険な状態となるでしょう」

「すると即死でも不思議ではないと」

「考えられなくはありません、ゴルバットの練度によつては十分に可能だと考えられます」

はああ、と、コロンボはため息を付きながら額に手を付ける。

「我々の国では市民が銃を携帯できますが、カントーも危険な地域ですなあ。そのように危険な生物を、誰もが携帯できるなんて」

「いえ、それは違いますよ」と、サカキがコロンボの言葉を否定する。

「銃は誰でも携帯できるし、誰でも打つことが出来ますが、ポケモンはそうではない」
コロンボはさらに身を乗り出す。

「と、言うこと？」

「『どくどくのキバ』は誰もが簡単に打つことのできる技ではないのですよ、相当な高レベルのゴルバットでなければ使えない技な上に、高レベルのゴルバットを操るには卜レーナーにも技量が求められる」

「つまり『どくどくのキバ』で人を殺すのは誰にでもできることではないと」

話題を誘導するようなコロンボの言葉に若干に居心地の悪さを感じながらサカキが答える。

「まあ、誰にでも出来ることではないでしょう」

「なるほど、だったらそつち方面を洗ってみるのも良さそうですね。ちなみにサカキさんは誰か心当たりのある人物などはおられますか？」

「さあ、しかし、毒のことならば、セキチクジムのキョウウさんがスペシャリストですから、そちらで聞いてみればいいかもしれません」

「なるほど、セキチクジムね……」

コロンボはそうつぶやいて再びメモを取り出したが、右手をゆらゆらさせながらオロオロする。

見かねたサカキが再びペンを取り出して「どうぞ」と、手渡した。

「ああ、ありがとうございます。それではこれで失礼しますよ。何しろ刑事部長を待たせてしまっているんでね」

今度はしつかりとペンをサカキに返して踵を返したコロンボだったが、再びカラクリ人形のようにくると体を反転させてサカキと向き合う。

「そうそう、最後にもう一つ……ツチャさんやサカキさんを恨んでいるような人物に心当たりはありますか？」

その質問に、サカキは神経を張り詰めて警戒した、それは、この殺人を物取りの犯行だと考えていれば到底出てくるはずのない質問だった。

「これは物取りの犯行なんでしょう？ どうしてそんな」

コロンボは笑って髪を掻きながら答える。

「いやあ……刑事部長はそうおしやつていますが、あたしはちよつと現場に違和感がありました……まあ、この件は刑事部長の考えるとおりだとは思っていますし、門外漢のあたしが出しやばるのは良くないんですが……念の為、ね」

猫背から自らを見上げるコロンボの目線に、サカキはおぞましさを感じた。この男の見た目に騙されてはならない、彼はコロンボの資質、能力を高く見積もった。決して油断してはならない相手だ。

「ツチャのことは、彼のプライベートですので何もわかりませんが、私の知る範囲では人から恨みを買うような人間ではありませんでしたよ。厳格を憎むような人間がいればわからないでしょうが」

「なるほど、あなたは？」

サカキは声色変えること無く答える。

「自惚れのように嫌ですが、特に思い当たりませんなあ。最も、私はジムリーダーとして、時には未熟な挑戦者を叩いて叱責することがありますので、それを恨まれることもしかすればあるかもしれません」

ふんふん、とそれに頷いたコロンボは、最後に右手をサカキに差し出した。

「いやあありがとうございます。それではあたしはこれで」

サカキもそれを握つて答える。

「ええ、先程あなたは私のことを仕事熱心だとおっしゃりましたが、あなたも負けていないですよ」

コロンボはそれに笑つて玄関の扉を締める。

サカキは今度はしつかりと玄関を背にしてから、ふう、と長い溜息をついた。

これは少し、面倒くさいことになるかもしれない。

ロサンゼルスからの刺客は、サカキを犯罪と言う枠の外にいる人間だという常識にとらわれていないかもしれなかった。

5. 捜査

トキワシテイの名物居酒屋の大将は、開店前の来客にも、自慢の通る声を少しも遠慮すること無く出迎えた。

その来客が警察の二人組であつたとしても、彼はそれに怯まない、そりやあヤンチャだつた少年時代だつたならば、多少の動揺や得も言えぬ恐怖感を覚えたかもしれないが、今の彼は居酒屋の店主という自分自身に大きな自信を持っているし、警察の厄介になるような、お天道様に顔向けできないようなことをやっていないという絶対の自信があるからだ。

「サカキさんのことだろうか?」と、大将はがなつているのによく通る不思議な声で彼等に問うた。

「ええ、そうです」と、コロンボは反射的に返事をしてしまつてから、気まずい表情でケージを見る。

彼は、コロンボのそのような態度に半ば諦めのような感情を抱いていた、サカキへの聞き取り後、今日一日は行動をともしたいと言うのを承諾したときから、覚悟していたことではある。

ケージは一つ咳払いをしてから、一步進んで大将に質問しようとしたが、それに被せるような大将の嘆きが先にくる。

「世の中つてのは、どうしてこうも残酷に出来てるんだろわかねえ。礼儀の一つも知らねえ若者はのうのうと生きているのに、ジムで頑張ってる若えのは殺されてしまう。サカキさんだつてそうさ、あんなにも礼儀正しくて、素晴らしい人なのに、教え子は殺されるわジムは燃やされるわでろくなもんじゃねえ」

大将の言葉にコロンボが目ざとく反応する。

「あれ、どうして殺しのことを？」

大将は豚肉を縛りながら答える。

「もう街中の噂さ、ジムトレーナーが殺されてジムは放火されたつてな。あんたらが来たつてことはあながち間違いつてわけじゃないんだろ。最も、サカキさんのことを思えばそれがただの悪い噂であつてくれたほうが俺はいいがね」

ケージは頭を抱えた。あまりにも大きな事件でマスコミの関心が高い、いつかこうなるとは思っていたが、思っていたよりも早かった。

「で？」と、大将は両手を机についてケージ等に問う。

「何が聞きたいんで？」

ケージは頭を振って気持ちを切り替えてから問おうとしたが、それもまたコロンボの

「すいません、灰皿ありますか？」と言う声に遮られた。

「ああ、それ使つとくれ」と、大将が指さした灰皿にコロンボが葉巻の灰を落としたのをしっかりと確認してから、ケージが問う。

「まずは、昨日サカキさんがこの店に来た時間を知りたいのだが」

「詳しく覚えちゃいねえが、深夜十二時半から一時までの間つてところかなあ」

「なるほど、それから火事までずっと店に」

「ああそれで間違いいねえ、俺の目の前の席にずっと居たんだ」

「そして、火事を目撃した」

「ああ……見てるこつちが辛くなるほどに狼狽えてたよ。その後すぐにジムに向かつて、それからさ。実は勘定をもらつてねえんだが、まあそんなこたあ小さなことさ、その時の客全員の勘定を取りそこねてるから、あまり小さな問題でもないんだけどねえ」

「客全員の？」

コロンボが首をひねる。

「まさか客全員が、ジムに向かったつてわけじゃないでしょうに」

「いやあ、サカキさんが全員分奢ると言ったからよ、別の客から取る訳にはいかないでしょう」

コロンボは感嘆の声をあげる。

「へえ、全員分奢るなんて随分と気前のいい。あたしやそんなの映画やドラマの中でしか見たことありませんよ。いつもそんな豪快な飲み方をする人なんで？」

「いや、どちらかと言えば静かに飲むのが好きな人だったよ。だからあのときは驚いたねえ」

へえ、と呟くコロンボを傍目に、ゲージが大将に問う。

「最近、不審な人物の噂などを聞いたことは？」

「いやあ、無いねえ。俺達よりもあんたらのほうが詳しいだろう」

確かのとおりだな、と、ゲージは頷いてメモをポケットに戻した。

「ご協力、感謝します」

大将は目線を豚肉に向けながら答える。

「ああ、さっさと犯人を逮捕してくれや」

☆

名物居酒屋の外でケージとコロンボを待ち構えていたのは、ジュンサーの運転する小型自動車だった。小型のそれは路肩に止めても対して交通の便を妨害すること無く、それでいて手頃なスペースを確保している。

ジュンサーは彼等を後部座席に乗せると、運転席から体を捻って「検死の結果、不可解なことが」と、彼等と顔を合わせる。

「不可解？」と、コロンボは身を乗り出した。

「ええ、実は、被害者が殺害された時間と、放火の時間に、一時間から三時間ほどの空きがある……」

「そんなに？」

素早くメモ帳を開いていたケージがそれに続いて言う。

「放火の通報があつたのが深夜三時弱……すると被害者が殺されたのは十二時から二時までの間となる」

「すると犯人は被害者を殺害した後、少なくとも一時間、あの現場に居続けたということですか」

コロンボが手のひらをはためかせながら言った。

「物取りにしちゃあ、いささか大胆すぎますなあ」

ふん、と、ケージが鼻を鳴らす。

「被害者を殺した後にはゆっくりと仕事をしたんだろう。そして、目的のものを見つけて、証拠隠滅を図ろうと火を放った」

コロンボはゆっくりと首を横に振って返す。

「まあそれもありませんが、あたしは被害者の周りを少し洗ったほうがいいんじゃないかと思えます」

「被害者の？」

何を言っているんだ、といったふうなイントネーションを返したケージに、更にコロンボが続ける。

「ええ、やっぱりあたしはこの殺人が物取りのついでとは思えないんです。さつきサカキさんから聞きましたが『どくどくのキバ』を扱えるゴルバットはとても高レベルで、優れたトレーナーでないと扱えないと言っていました。サカキさんが言うならそうなんでしょう」

コロンボはそこで一拍置き、ケージやジュンサーが何も発しない事を確認してから続ける。

「それほど優れたトレーナーが、どうして物取りをする必要があるんです？ それに、殺害された時刻と放火の時間のズレ、確かにケージさんの考え方もできますが、あたしには犯人が被害者を殺して目的を達成した後、現場を荒らして物取りの犯行に見せかけたように思えます」

ううむ、と、ケージは唸った。

「確かに、物取りと断定するには引つかかる箇所もある……よし、被害者の周りも少し

探ってみよう」

「素晴らしいお考えで」

「そうと決まれば、私は捜査本部に戻ろう。コロンボ警部、残念だがここでお別れだ、明日からはジュンサーさんと一緒に、研修に戻ってもらおう」

コロンボは右手を上げて答えた。

「はいわかりました……あのー実はセキチクジムに行ってみたいんですが、よろしいでしょうか？」

コロンボがすんなりと言うことを聞いたのがよほど嬉しかったのだろう。ケージは笑って答える。

「研修と言っても、スカスカのスケジュールで実質旅行みたいなものです。自由にやってくれて結構、周りの世話はすべてジュンサーが行います」

「はい！ よろしくおねがいます！」と、運転席から上半身を反転させたままのジュンサーが意味のない敬礼をする。

「ええ、ありがとうございます」

コロンボは右手を振ってケージを見送った。

セキチクシティへとつながる大きな道路を、ジュンサーが運転する軽自動車が走って

いた。

助手席のコロンボは、途中購入したインスタントカメラで路肩に寝そべるポケモンたちや、バトルに勤しむトレーナーたちを取り続けていた。ジーコ、ジーコというインスタントカメラ特有の巻き上げ音が、車内に響いていた。

「フィルムが無くなってしましますよ」と、ハンドルを握るジュンサーは、特にそれに悪感情を持つこと無く、微笑んで言った。例えばそこにいるのがケージのような多少気難しい男であればあるいは険悪なムードになっていたかもしれないが、幸いなことに、ジュンサーはコロンボに対しておおらかであった。

「また買えばいいんです」

コロンボは海を跳ねた何らかのポケモンを写真に収めながらそう言った後、満足したのか車の窓を締め、カメラをポケットに収めながら、背もたれに体重を預ける。

「そんなに珍しいものはありませんでしたよ」

「いやあ、あたしからすれば何もかもが珍しい……あ、ほら、今あそこを飛んでつたのなんてポケモンなんです？」

ジュンサーは運転に支障が出ない程度にちらりとコロンボが指さしたほうを見て答える。

「あれは、オニドリルですね」

「へえ、なんであんなところを飛んでるんだろう」

「オニドリルは魚を食べるので、それを狙っているんでしょう」

「はあ、なるほど」

コロンボは再び窓を開け、ポケットから取り出したインスタントカメラを空を旋回しているオニドリルに向けてシャッターを切る。

コロンボが満足げにカメラをポケットに戻し、窓を閉めたタイミングで、ちょうど交差点に差し掛かった小型車は、赤信号に従って停止した。それを待っていたかのように、ジュンサーが声を上げる。

「先程のコロンボ警部の推理は、お見事でした。私、とても感動しました」

コロンボはにやけて頬をかいた。そして言う。

「ああ、そうだ……一つ聞きたいんだけど、いい？」

「はいどうぞ！」

「トキワジムリーダーのサカキさんって、どんな人なの？」

コロンボの質問に、ジュンサーは間髪入れずに答える。

「私はトキワの生まれですからよく知っています、素晴らしい人格者です！」

「ああそう……ジムトレーナーの人たちの悪い噂とかは聞いたことある？」

「いえ、全く聞いたことはありません、皆さんサカキさんのように素晴らしいトレーナー

たちです」

「そう」と一言答えて、コロンボは座席に座り直す。そして、一つ息を吐き「これはケージさんの前では言わなかったけどね」と言つて続ける。

「あたしはこの殺人に、トキワジムの人間が関係していると思つてる」

コロンボの推測に、ジュンサーは驚きの声を上げるが。すぐさまその推理の矛盾に気づいて指摘する。

「しかしコロンボ警部、トキワジムはサカキさんを中心にしめんタイプのエキスパートが集まるジムです。ゴルバットを扱うトレーナーはいません」

「いや、あたしもそれはわかつてる。ジムの関係者にゴルバットを扱えるトレーナーが居たならば、状況関係なく最有力容疑者だろうからね」

ジュンサーは首をひねつた。発言があまりにも矛盾しているからだ。ちようどその時に、信号が青に変わったので、アクセルを踏む。

コロンボもジュンサーの疑問を理解しているのだろう、小型自動車のスピードが交通の流れに乗つたあたりで続ける。

「死体の状況から、あの時、ジムリーダー室には被害者でも犯人でもない第三者が居たと、あたしじゃ考えています」

「死体の位置のことですね」

「ええそうです。被害者はジムリーダー室のドアに足を向け、うつ伏せに倒れていた。そして背後から襲われている。だとすると、ジムリーダー室に先に居たのは被害者ということになる」

「二人組の物取りであったという可能性は？」

「そうすると、被害者が無抵抗であったことが気になります。被害者の実力を疑うよりも、被害者がジムリーダー室で、顔なじみと向かい合っていたところに、背後から襲われた、と考えるほうが自然でしょう」

「なるほど」と、ジュンサーは頷いた、確かにそれならば、すべての説明がつく。

だが、それはあくまで現場の状況のことであって、一つ、あまりにも不可解な点があった。

「しかし……一体何のために？」

ジュンサーの疑問はもつともなものであった、死体の状況から逆算したその状況は、反面その意味合いという点からは、てんで不可解。

コロンボも額を掻いて答える。

「そう……それがさっぱりわからない」

ジュンサーの運転する小型自動車は、疑惑を乗せたまま、セキチクシティに入ろうとしていた。

6. 教育

ヤマブキシテイ、タمامシシテイにイメージを奪われてはいるが、セキチクシテイはカントーで最も栄えている都市の一つと言っても良かった。世界初の大規模ポケモンサファリパーク、ポケモン園、西にはサイクリングロードがあり、海に面して海水浴も楽しめる一大レジャー都市であり、何よりポケモンジムがある。

セキチクジムもまた、カントーでも有数のジムの一つであり、ジムリーダーのキヨウは忍者の末裔としても有名で、毒タイプを中心としたポケモンの運用には、彼らが先祖代々に受け継いできた忍術が生かされているとも言われ、彼の戦いを見るためにセキチクシテイを訪れる観光客もいるほどだ。

ケージ刑事部長から連絡を受けていたのだろう。手品師の様に奇抜な格好をしたセキチクジムトレーナーは、コロンボ達を快くジムに通した。

ジュンサーは認定されていないジムに足を踏み入れることに緊張していたのか、少し表情をこわばらせながらジムに足を踏み入れる。対してコロンボは、ニコニコと満面の笑みを浮かべながら足を踏み入れる。彼は一度ポケットに手をつ込み、インスタントカメラはポケモン園でフィルムをすべて使い切ってしまったことを思い出してそれを

引つ込めた。

「あちらが、セキチクジムリーダーのキョウです」

ジムトレーナーが指した先、板張りの対戦場の中央には、黒装束の男が鎮座していた。コロンボほどの観察力を持っていなくとも、彼がキョウであることは明白だ。

「やあ、これはこれは」と、コロンボはその方向に一步踏み出した。ジムトレーナーとジュンサーが声を上げてそれを止めようとしたのと、コロンボが額を強かに打ち付けたのはほぼ同時だった。

「あたた……あれ、何かがここに」

コロンボは右手で額を擦りながら、左手で自らがぶつかった何かをさすった。ちようどそれは上手なパントマイムのようなようだった。

「申し訳ありません、言い忘れていました」と、ジムトレーナーが言う。

「このジムでは、いたるところに見えない壁が張り巡らされています」

大丈夫ですか、と、ソロリソロリと慎重にコロンボに近づくジュンサーに礼を言いながら、コロンボがそれに返す。

「一体どうして」

「精神を鍛えるためです。目に見えるものだけが真実ではないと言うことを、体に染み付かせるためだと、ジムリーダーは言っていました」

「そりや良いけれど、あたし達は別に精神を鍛える必要はないんだ、悪いけど、ジムリーダーさんと直接話すことが出来る距離まで、案内してくれない？」

コロンボは、見えない壁に両手をつけながら、その向こう側にいるキョウを見た。心なしか、彼は笑いを噛み殺しているようにも見えた。

「はじめましてコロンボ警部、私がセキチクジムリーダー、キョウです」

その男は、服装を抜きにして考えれば、おおよそ忍者らしくはなかった。

オールバックで整えられた髪、精悍な顔つき、少ししわのある表情は、むしろ彼の人生の深さを象徴しているように見える。

だが、彼がまとっている衣服が、あまりにもステレオ的な、見るものすべてに彼は忍者だと力づくで言わせてしまうほどに忍者的であったために、それらの要素に気づくものは少ない。

差し出された右手を、コロンボはよく観察しながら恐る恐る両手で握った。

「いやあどうも……ごめんさいね、あんなことがあったから怖くて……いやあしかし、本物のニンジャに出会えるとは思わなかったなあ。カミさんが聞いたらとても喜ぶことでしょう」

キョウは同じようにジュンサーとも握手を交わし、その場に腰を下ろす。

「さて、ロサンゼルスからの客人が来ることは聞いていましたが、何を望んでいるのかは聞いていませんでした。何かお望みですか？ ポケモンバトルを見てみたいとか、バトルの指南をしてほしいとか、ああ、それとも忍者としての能力をご所望ですか？」

例えばどこかに忍び込んだり、重要な書類を狙ったりも出来ますよ」

「いやあ、あまりからかわんでください」

コロンボは笑いながら自身も腰を落とす、それに釣られるようにジュンサーも、少しスカートに気をやりながら正座した。

「実は、どくポケモンのことで少し聞きたいことがあります……いやね、お恥ずかしながらあたしはポケモンに関しては全くの門外漢なもので」

「なに、何も恥ずかしいことではないでしょう。私だってロサンゼルスに行けばただの無知な一人の男だ」

「そうおっしゃっていただく気持ちになりませんあ……それで、聞きたいこととこのうのは、ゴルバットの『どくどくのキバ』と言う技についてなんですが……」

「ほう」と、キョウはそれに反応して、すぐさま腰のモンスターボールを跳ね上げるように投げた。さすが忍者というべきか、その動きは素早く、それを見慣れぬコロンボは、一体どの様にそれを投げたのかもわからない始末だ。

跳ね上げられたボールからは、こうもりポケモンのゴルバットが姿を現す。それに目

を奪われているコロンボとジュンサーをよそに、彼はスイと彼らの周りを旋回してから、主であるキョウウの肩に止まった。

「はあ、それがゴルバットですか、確かにコウモリみたいだ……あたしも触ってみたいもんですが、毒があるのでしよう」

「ははっ、なあに、誰にも彼にも撒き散らすわけじゃありませんよ。そら、行つて来い」
キョウウがそう言うと、ゴルバットは音もなく飛び立ち、コロンボの膝の上に止まる。
「頭をなでてやってください」

コロンボはゴルバットの巨大な口から見えるキバにおっかなびっくりに震えながら、恐る恐るその頭を撫でる。するとゴルバットは目をつむつてその右手に体を預け、嬉しそうに鳴き声を上げる。

コロンボは一点笑顔になつて言う。

「なんとまあ、可愛らしいもんですなあ」

「そうでしよう、ほら、ジュンサーさんも」

キョウウに誘われ同じようにゴルバットを撫でるジュンサーを見てから、キョウウは言う。
「一口にどくタイプだの何だのと恐れても、ポケモンは高い知性を持つ心ある生物なのです。たとえ私達人間に毒を打ち込む能力があつたとしても、それを愛するものには使

わんでしよう。まあ、意図せず体中から毒が染み出してしまいうポケモンがないわけではありませんが、ゴルバットはそうではない」

「なるほど愛情ですか、確かに我々も銃を撃つことが出来ますが、愛する人には撃ちませんねえ」

「さよう、どくポケモンに対する大きな誤解がとけたところで、本題に入りましょう。『どくどくのキバ』について聞きたいのですね?」

キョウが一つ指を振ると、ゴルバットはコロンボの膝から飛び立ってキョウの肩に戻った。

「はい、実はですね……これは仮の話ですよ……ある殺人事件にですね。ゴルバットの『どくどくのキバ』が使われた場合に」

コロンボは気まずそうに更に続けようとしていたが、そこにキョウの声が割って入る。

「なるほど、トキワジムの事件についてですな」

「はあ……まあ……そういうことです、決して他意があるわけではありませんので」

「なに、構いませんよ。あの事件には私も心を痛めているし、状況が状況だけに、我々に考えが及ぶのも無理はない」

キョウは笑って続ける。

「確かに、私を含め、私の門下生たちのごくごく優秀な一部の者達は『どくどくのキバ』を扱えるゴルバットを仲間としています。ポケモンは基本的に人間を攻撃しませんが、我々がその気になれば、それを人に向けることも出来るでしょう」

ジュンサーは、その言葉に反応してキョウの肩に目を向けた。そのゴルバットは彼女に見られていることに気づき、気まずそうにふいと目をそらす。

「しかし、もし私の門下生たちが、人を殺めるようなこととしたならば、私も腹を切らなければならぬでしょうなあ」

「どうしてです?」

「ありえてはならないことだからですよ。ポケモンを扱え、その力を磨くということは、人より強く、強くなっていくことです。人より強いということと、社会性を持つことは、本来ならば相反する要素。力を持てば持つほど、振れるワガママは大きくなるでしょう」

コロンボはそれに頷いた。キョウは更に続ける。

「その相反する要素を、一人の人間に宿らせることこそが、我々ジムリーダーの、教育者としての務め。その我々の直接の息がかかっている門下生が、殺人などという、最も社会性から隔離した行為をとったとなれば、その責任は、我々にある」

「なるほど、素晴らしいお考えをお持ちですなあ」

「さよう、ロケット団のような存在が現れ始めた以上、我々が気を引き締めなければ」
「ロケット団？」

その言葉に、コロンボは興味を示す。

「なんです？ それは」

「ポケモンの力を背景に持つ暴力組織です」と、コロンボの傍らに座るジュンサーが説明する。

「数年前から台頭してきた組織で、今では潜在的な団員トレーナーが数多くいると考えられています」

「なるほど、マフィアみたいなものですね」

「はい、ポケモンマフィアと称することもあります」

その話題を嫌うように、キョウが首を振る。

「落伍者の集まりです。トレーナーと言っても、その殆どは初歩的な技術もない」

「しかし、大きな組織となっている以上、中には実力者もいるということでしょう？ マフィアなどはそうですねえ」

「それが、まだよくわかっていないんです」

ジュンサーは目を伏せて続ける。

「組織そのものが極端な秘密主義に覆われていて、いくらしたつばの構成員を問いただ

しても、幹部はおろかボスの身元もまだわかっていません」

「ボスの身元も割れていないだつて！」

コロンボは大きく背を反らして驚きを表現する。

「そりゃとんでもない組織だ。どこにでも多少似たようなことはあるとはいえ。ロサンゼルスのマフィアよりも進んでる」

「申し訳ありません、コロンボ警部にはお恥ずかしいところばかりをお見せして」

「いやいや、君が謝ることじゃない。憎むべきは殺人だよ」

暫くの間、三人は沈黙していたが、やがてキョウが切り出す。

「さて、それでは、我々の中で『どくどくのキバ』を扱えるトレーナーのリストでも作りましょう。もちろん私も含めてですがね」

しかし、コロンボは両手を振ってそれを拒否する。

「いえいえ結構。あたしちよつとした疑問を聞くために来たのであつて、決して捜査しに来たわけじゃありません。そもそもあたしは外部の人間だから、そんな権限もないですからね。いやはや、おかげさまで今日は楽しいものを見ることが出来ました。ご協力、感謝します」

彼ら三人は立ち上がり、コロンボが差し出した右手をキョウが握る。

「いえいえこちらこそ、コロンボ警部が柔軟な考えをお持ちの方でよかったです。また何か

あつたらいつでもお越し下さい。まだバツジを集めている途中の、君もね」

不意に話題を向けられ、ジューンサーは少し顔を赤くしながら礼を言つて、キョウの手を握る。

笑つてそれを眺めていたコロンボだったが、やがて何かを思い出したかのように声を上げる。

「あ、そうだ、もう一つだけよろしいですか？」

「一つと言わず、いくつでも」

「ありがとうございます……ええと、トキワジムリーダーのサカキさんって、どのような人物で？」

キョウは少し真面目な顔になつて答える。

「彼は素晴らしいトレーナーであるだけではなく、素晴らしい人物でもある。我々の中でもかなり古くからこの業界に貢献しているし、彼の世話になつたトレーナーは数多いだろう」

そしてキョウはこころ苦しげに息を呑んでから続ける。

「彼の無念は痛いほどによく分かる。彼が築き上げた倫理の城で、こともあろうがジムトレーナーが殺害されるだなんて、私ならばとても耐えることは出来ないだろう」

コロンボ警部、と彼の名を呼んでさらに続ける。

「この事件の責任者の方に、必ず事件を解決してほしいとお伝えください。我々は協力を惜しみません」

「はい、必ず」と、コロンボはまっすぐにキヨウを見て答えた。

7. 展開

カントー地方の中心街、タمامシシテイ。

カントー文化のすべてが集結すると言っても過言ではないこの街は、良くも悪くも、人々の活気に満ち溢れている。

その中でも一等地に場所を構えるタمامシデパートは、世界で最もポケモンに関する商品が並べられている場所の一つだろう。戦闘補助用の器具、肉体を強化するプロテインに近い薬品、豊富なわざマシン、かと思えば田舎の雑貨屋で扱うような小物も豊富に取扱い、そのラインナップにスキはない。

その日の視察を終えたコロンボは、世話係のジュンサーを引き連れてタمامシデパートに足を運んでいた。ポケモン文化に馴染みのないロサンゼルスから来た彼にとつてタمامシデパートにあるものはすべて目に新鮮であり、彼はほう、とか、はあ、とか言つて、横にいるジュンサーにそれらの商品についていろいろと聞きながら、先程までの視察とは大違いの満面の笑みを浮かべて散策していた。

「この階は土産物屋ですね」

タママシデパートの四階に、エレベーターから降り立ったコロンボは、そばにいるジュンサーからそう説明された。コロンボが目につく者すべてに説明を求めるものだから、ジュンサーは彼がそれを言う前にすべてを説明してしまう。

「へええ、土産物……そうだ、あたしもカミさんになんか買って帰らないとね。ロンドンに行ったときには何も買わなかったからえらくへそ曲げられたんだ」

コロンボはそう言つてフラフラとショーケースに近づく。

「これは何だい？」

コロンボはショーケースに並べられた石を指さしながら言つた。それらは宝石のような輝きを見せていたが、宝石のように美しく、そして小さくカットされているわけではなく、まるで土から掘り出されてそのままここに入れられたような、商品に似合わぬアンバランスな無骨さを持っている。

「ああ、それは、進化の石ですね」と、ジュンサーも同じくショーケースを覗き込みながら答える。

「不思議な力を持つ石で、ポケモンに与えると進化することがあります」

その説明に、コロンボはへえ、と、素つ頓狂な声を上げた。進化についてはすでにジュンサーから説明を受けていたが、それが石を起点に起こることもあることは知らなかった。

「私のピカチュウもこのかみなりのいしで進化するんですよ」

ジュンサーが腰のボールに手をやり、ショーケースの中にある琥珀色の石を指差しながら言う。

「へえすごい。でも、それならどうして君は買わないの？ 進化したほうがずっと強くなるんでしょ？」

コロンボがそれを不思議に思うのは無理もない、ショーケースに飾られるかみなりのいしは、その輝きこそ宝石のようだが、値段自体はともリーズナブルで、したっぱとはいえ警察官の手が届かないものには思えなかった。

うーん、と、ジュンサーは恥じらいから少し顔を赤くして答える。

「今でさえ私の言うことは話半分なのに、ライチュウに進化してしまうと、言うことを聞かなくなってしまうかもしれないし……それに、今以上にご飯を食べられると、私が食べられなくなってしまうです」

その返答に、コロンボは「なるほどねえ」と、微笑む。

「しかし、これをカミさんに買ってもし方がないな、さて、他のものを」

ショーケースの周りを確認したコロンボは、一つだけ店に残っているぬいぐるみを見つけた。

それはピンク色で丸っこいポケモンをかたどったぬいぐるみらしく、その可愛らしさ

は、とても女性ウケが良さそうに見える。

「あ、あれにしよう」

コロンボは足早にそれに近寄り腕に抱えた。

「それはピッピの人形ですね。可愛らしいですし、奥さんとても喜ぶと思いますよ」

ピッピというポケモンについてはまた聞けばいい、と、コロンボはそれを抱えたままレジに向かった。猫背で小さく見えるコロンボが大きなぬいぐるみを両手に抱えているのを見て、ジュンサーは笑いを噛み殺した。

「いやあ、カミさんにぬいぐるみをプレゼントするなんて初めてですよ。果たして気に入られるかどうか」

「絶対に喜ばれますよー！」

コロンボが財布からくしゃくしゃの札を取り出し、プレゼント用のラッピングを頼もうかとしていたその時「あ」という女兒の声が聞こえ、コロンボとジュンサーはそれに振り返る。

見れば、十歳ほどの少女が、泣きそうな顔をして、レジにあるピッピ人形を眺めている。

その視線の意味するものを素晴らしい洞察力で読み取ったコロンボとジュンサーは、同じく素晴らしい洞察力を以てして気まずそうにレジの手を止めている店員に問う。

「これ、在庫とか無いんですか？」

「申し訳ありません。これが最後の一つで……」

「ピッピ人形は人気の商品ですからね」

少女に負けないくらい泣きそうな表情をするジュンサーを見て、コロンボは猫背をさらに曲げて彼女と目線を合わせる。

「お嬢ちゃん、あの人形が欲しいんだね」

少女はコクコクと頷く。見れば、手にはコロンボが出したものと同じくらいくしゃくしゃの札が握られていた。

はあ、と、コロンボはため息を吐きながら、店員に振り返って言った。

「悪いけど、返品ってことにしてくれない？」

その言葉を待っていたかのように、店員は手早く作業を再開し、くしゃくしゃの札をコロンボに返した。

「はいどうぞ」と、コロンボは少女に道を譲る。彼女は跳ね上がりながらレジ前に駆け、くしゃくしゃの札を置いた。

「おじさん、ありがとう」と、少女はコロンボに札を言う。

「いやいや、なんの。うちのカミさんもお嬢ちゃんに譲ったなら許してくれるよ」

「お礼にものまねしてあげる」

笑った少女はそう言つて袖で顔を拭き、すぐさま生意気そうな表情を作り上げて、声色を変えて言う。

「私おてんば人魚のカスミ！」

コロンボはそれにポカンとした。誰かのモノマネをしているのだろうが、似ているのかどうかさっぱりわからない。声色の変え方も素晴らしいし、表情の変化も素晴らしい事はわかるのだが。

「わあ！　すごい！」

しかしジュンサーは先程までの表情を一変させて手を叩いた。コロンボの呆けに戸惑っていた少女はそれに満足げな表情を見せる。

「そんなに似てるの？」

「似てますよ、すごいすごい！」

「おじさんカスミちゃん知らないの？」

少女の問いに、コロンボは髪を掻きながら苦笑いする。

「ごめんねえ、おじさん外国から来たからわかんないんだ」

「おじさんにもまねしてあげたいのに」

目を伏せる少女に、コロンボは一つ首をひねつてから言う。

「そうだ、トキワジムリーダーのサカキさんなら、あたしわかるよ」

しかし、今度は少女が首を振って謝る。

「私サカキさんと会ったことがないから出来ない」

「ああ、ごめんねえ。じゃあまた今度あった時にやってみようからね」

ポンポンとコロンボが少女の頭を撫でた時、おそらく彼女の名前を呼ぶ声が出て、バタバタと一人の男が駆け寄ってきた。

「申し訳ない！ 目を離れたスキにはぐれてしまいました……何かご迷惑を？」

少女がその男に「パパ」と言ったのを確認してから、コロンボが微笑む。

「いえいえ何も、それどころかとても素晴らしいモノマネを見せていただいて」

コロンボがもう二、三言彼女を褒めようとした時、今度は「コロンボ警部！」と、コロンボを呼ぶ声が出て、バタバタとはせず、しかし少し早歩きに、ケージが近づく。

「あれえ、ケージさん、何かありました」

驚くコロンボに、ケージは続ける。

「少し顔を貸してくれ」

ケージが急いでいるようだったので、コロンボとジュンサーはすぐさま彼の後に続いた。

「おじさん、バイバイ」

その背に手を振る少女に、コロンボとジュンサーは振り返って、小さく手を振った。

タمامシデパートの屋上は、広く見晴らしのいいイベント広場になっている。

だが、この日にイベントはなく、屋上はガランとした。誰もいないただっ広い空間だった。

「随分探したんだぞ」

自動販売機でおいしいみずを購入しながら、ケージはコロンボに毒づいた。警察局視察のときのあのつまらなさそうな表情はどこへやらの雰囲気、少し思うところもあった。

「それは仕方がないでしょう。今日の予定は終わったんだから」

コロンボとジュンサーはケージからおいしいみずを手渡され、それで喉を潤す。

そして、単刀直入にケージが言った。

「事件に進展があった。君の言うとおりツチャ氏の周りを洗ったところ。いくつかのトラブルが見つかった」

「トラブルと言うと？」

「喧嘩だ」

「喧嘩、被害者は品行方正だったんでしょう？」

「ああ、真面目で堅物との評判だった。しかし、報告書には数件の喧嘩の当事者として名

前が上がっている」

へえ、と、コロンボとジュンサーは驚いた。だが、ケージは更に続ける。

「喧嘩の相手はそれぞれ違う。ショップ店員に、ゲームコーナー店員、建築業者、システムエンジニア等、職業もバラバラだ」

「見境がありませんなあ」

「ああ、だが」と、ケージは一つ咳払いをして続ける。

「そのうち二人が、後にロケット団構成員として捕まっている」

ケージのその言葉に、ジュンサーは驚きで跳ね上がった。コロンボは至極冷静に問う。

「なるほど、つまりマフィアの構成員と敵対関係にあった可能性がある」と

「ロケット団を知っているのかね」

「ええまあ、少し話に聞いた程度ですがね……」

コロンボのつぶやきにケージは話が早いと続ける。

「物取りの線を手放さなかったわけではないが、コロンボ警部の言うとおり、これは最初から殺しが目的の、ロケット団による報復の殺人である可能性が出てきた」

笑みを見せるケージに「ええ、あたしもそう思います」と一端は同意したコロンボだったが、やがて「あれ」と、髪を掻きながら呟く。

「でも、おかしいですねえ」

コロンボがそれに疑問を浮かべるのが予想外だったのだろう。ケージは驚きの表情を見せながら「何がおかしいのかね」と問う。

「あたしもね、マフィア絡みの殺人はいくつか担当したことがあるが。見せしめや報復の殺人を、物取りの犯行と偽装するのは、いささかおかしいんじゃないでしょうか」

その指摘に、ケージとジュンサーは共にうーん、と唸りながら空を見上げた。一理ある意見だ。しかし、それを認めればまた捜査が振り出しに戻ってしまう。

「それなら警部は、ロケット団絡みの殺人だというのも、犯人の偽装だど？」

ジュンサーの質問に、コロンボは首を横に振る。

「いやあ、そんなことはないと思いますよ。被害者がマフィアとトラブルを起こしていたことは間違いないですからね……しかし、そうなると妙な状況になりますなあ」

「確かに妙だな」と、ケージもそれに同意する。

「ロケット団が報復のためにツチャヤ氏を殺害したのなら、妙な工作をする必要はない、むしろロケット団の犯行だと見せつけるほうが自然だ」

コロンボもそれに頷く。

「つまり……この殺人とマフィアとを関連付けられたくない何かがあった。ということでしょう」

ケージは激しく頭をかきながら答える。

「もしくは、この線は全くのハズレか。ロケット団云々というのは我々の考え過ぎで、最初からずさんで間拔けな、コンビで凶暴な物取りの犯行か、ということか」

しかしコロンボはゆっくりと首を振ってあんにそれを否定した後、突如駆け足でケージの横をすり抜ける。

「おい、どこへ行く」

彼を呼び止めるケージに、コロンボは振り返りもせずには答える。

「少し話を聞きたい相手が出来たんです、いまさら捜査に介入するなどは言わんでしよ
う？」

無茶苦茶な理屈だったが、コロンボの勢いにケージはううむと唸り、ジュンサーはよ
うやく思い出した様に跳ね上がって、コロンボの後を追った。

8. 標的

トキワジムリーダーのサカキは、スーツケースに荷物を詰め込みながら時計を見やつた。まだ少し、交通機関のタイムリミットには余裕があつた。

つけっぱなしになっていたテレビでは、トキワジムでの事件についての特集が組まれている。画面に映る自称有識者たちは、ジムバツジを狙つた犯行と、最近の若者の怠惰な態度をなんとか結びつけようと必死なようで、冷静になつて考えれば無茶苦茶な理論を、さも当たり前のように論じている。

ふん、と、それを鼻で笑いながら。サカキはテレビのスイッチを切つた。実力もなければ、度胸もない、若い頃に少しだけ運の良かった老人が、今を生きる若者の何がわかるものか。今の若者が、死すら恐れなほほどに度胸にあふれていることを、サカキは痛いほど知っている。

小さく、呼び鈴が鳴つた。少し、サカキがそれを不思議に思つて様子を見ると、今度はくるつたように何度も何度も呼び鈴が鳴らされる。

随分と無礼な来客だな、と、サカキは呼び鈴の音が響く玄関に駆け足で向かい、扉を開く。

その向こう側にいたのは、ボロボロのレインコートと、猫背とくせ毛だった。

コロンボはサカキの表情を確認すると、にへらと笑って言う。

「ああ、どうも……いらつしやらないのかなと思って……」

人がいなければ呼び鈴を鳴らし続けていいというものではないのだが、サカキはそれを飲み込み「いかがしましたか？」と問う。

「ああいや、少し確認したいことがあるもので……お邪魔してもよろしいですか？」

「ええ、構いませんよ」

サカキはコロンボの表情を確認しながら扉を開き、彼を招き入れる。

この男は油断ができない。サカキはコロンボを警戒している。

「今日は、一人で？」

サカキはコロンボの後ろから誰もついてきていないことに気づき、自身の倫理的奴隷と言っても過言ではないケージが存在しない事を警戒した。

「ええ……実はお付きのジュンサーがついてきてくれたんですが、適当な理由をつけて待つてもらってます」

「なにかまずいことでも？」と、問いながら、サカキはコロンボをリビングに通す。

コロンボはサカキの問いに答えるより先に、机の上のスーツケースに気づき「あれ」と声を上げる。

「どこかに出かけるんで？」

サカキは特に戸惑うこと無く返す。

「ええ、近々タママシジムのエリカ嬢とエキシビジョンする予定がありますので」

「へえ、他のジムリーダーとねえ、そりゃあ楽しみなもんですなあ……しかし、トキワとタママシならそこまで遠くはないでしょう？ あたしもついさっきタママシから来たところですけど、そんなに時間はかかりませんでしたよ」

「ええ、まあそうですね。正直なところ、トキワジムもまだ改修が終わっていませんし、ここに居ても街の人に気を使わせるだけですから、都会で気分を入れ替えたいんです」
「よ」

「はあなるほど、確かにそれがいいかもしれませんがなあ」

露骨に他人事なコロンボの態度にサカキは少し苛立ちを覚えたが、すぐさまそれを抑えて言う。

「ところで、確認したいこととは？」

「ええはいはい、ああ、その前にですね」

コロンボはもったいぶってそう言うと、レインコートのポケットからモンスターボールとサインペンを取り出して、ニコニコと笑いながらサカキに差し出す。

「実はこのモンスターボールにサインをお願いしたくて……」

サカキは感情を抑えながら「ええ、構いませんよ」と、それを受け取った。

コロンボはヘラヘラ笑いながら続ける。

「いやあ……コレはほとんど職権乱用みたいなものですから、ジユンサーに見せる訳にはいかないでしょう?」

「そんな大げさな、私はこういう類のことは基本断らないようにしているので、いつでもどうぞ」

サカキは手慣れた手付きで球体に器用にサインを描き、ペンとボールをコロンボに返す。

コロンボはニヤニヤを続けながらそれを受け取った。

「いやあありがとうございます。こんなもんもらっちゃって……カミさん飛び上がって喜びますよ」

あ、そうそう、と、もう二、三言続けようとしたコロンボに、サカキが釘を刺す。

「コロンボさん、お喋りもいいが、もう少ししたら私も家を出なければなりませんので」「ああ、ああすいません。イケませんねえ、あたしども、これが悪い癖で、カミさんにも直せ直せと言われているんですがね」

サカキは笑顔を維持したまま、コロンボの目的を催促した。

コロンボはポケットからメモを取り出してパラパラとめくる。

「ええと、そうそう。実はですね、今回の事件、物取りの犯行から、ロケット団絡みの犯行である可能性が出てきたんですよ」

「ロケット団、ですか」

サカキは、コロンの言葉に驚いたように見せながら、内心の動揺をなんとか表に出さずに堪えた。

「どうしてそうお考えに？」

「なに、被害者の周りを調べたら、ロケット団員とのトラブルがいくつか出てきたんですよ。物取りの突発的な犯行だと考えれば不可解だった点も、マフィア絡みの犯行だと考えれば、いくつか解決する」

ああそうだと、コロンボが続ける。

「そう言えば、あたしが『どくどくのキバ』について聞いた時に、どうしてロケット団の名前を出してくれなかったんです？ キョウさんなんかは、すぐにロケット団の名前を出してくれましたよ？」

そう言われ、サカキは必死に頭の中で言い訳を考えて答える。

「それを聞かれた時、ロケット団の名前が浮かばなかったわけじゃありませんが。コロンボさん、ロケット団と言えば、ポケモンを扱える事を直接暴力に結びつけているような連中ですよ、そんな連中に、手塩にかけて育てた、息子のようなジムトレーナーが簡

単に殺されるだなんて、考えたくもない」

「なるほど、確かにそうですね」

そう言つて何かをメモしたコロンボに、サカキが問う。

「しかしどうして、物取りの犯行ではないと?」

コロンボはペンを振つて答える。

「あたしね、現場をひと目見たときからおかしいなと思つていたんですよ。被害者はポケモンを出していませんでした、つまり被害者に抵抗した後はなく、背後から不意打ちされて倒されていたということです。しかし死体はジムリーダー室のドアに足を向けてうつ伏せに倒れてた。これから考えられると、ジムリーダー室に最初に居たのは犯人ではなく被害者だということなんです。そうなると、物取りの犯行である可能性はぐつと低くなります、いくら血の気が多い物取りでも、凄腕のトレーナーがいれば、とりあえずは引き返すでしょう?」

サカキは「なるほど」と頷いてそれを肯定するが、なんとか手はないものかと考えを巡らせる。

「もう一つ可能性として考えられるのは、ツチャさんと物取りがグルで、土壇場になつて物取りが裏切つたということです。ツチャさんは物取りと共謀するような人間ですか?」

サカキは怒りの表情を作りながら、しかし苦虫をかみつぶすような心境でそれを否定する。

「コロンボさん、それはあまりにも失礼でしょう。私の知る限り、ツチヤはそんな男ではない」

コロンボの誘導によつて、サカキは自らの手で、逃げ道の一つを潰されてしまった。「ええ、あたしもそう思います。マフィアの構成員と戦うような正義感の強い男が、そんな事をするとは考えられませんねえ」

コロンボは飄々と続ける。

「しかしですね、マフィアの報復と考えると、やっぱり不可解なところが出てくる」
「ほう、それは」

「いやね、例えばマフィアが殺したとしてですよ、それを物取りの犯行に偽装する意味がないでしょう？ 普通マフィアつてのは、自分たちがやった事件がデカければデカイほど、自分たちの手柄だと自慢するはずですよ」

サカキはそれを考えるふりしながら「なるほど」と、コロンボに返す。

コロンボは頭をかきながらサカキに問うた。

「サカキさんはどう思いますか？ この妙な構図」

「さあ、さっぱり分かりません」

「あたしは一つ仮説を立てているんですがね……いや、やめときましょう、人に話すにはあまりにもバカバカしい」

恥ずかしげに頬を掻くコロンボに、サカキは自らが誘われているのではないかと思いはじめていた。しかし、目の前の男がこの事件についてどこまで掴んでいるのかも気になる。

彼はそれに飛び込むことにした。

「ここまで言っておいて、そこだけ誤魔化すというのは酷な話でしょう。ぜひとも語っていただかないと」

「ええ、そうですね……興味あります?」

「ありますね」

「いやでも、あなたは急いでいらつしやるし」

コロンボを怒鳴りつけてやりたい衝動をこらえながら。サカキは笑顔で答える。

「なに、駆け足で行けば間に合いますよ」

そうですね、と、形だけの謙遜を見せてから、コロンボは言う。

「つまりあたしが考えているのはね……手を下したロケット団の人間が、この事件とロケット団を関連付けて欲しくないと考えているから、こんな偽装工作をしたんじゃないかと考えているんですよ」

コロンボの推理力に、サカキは心の底から震え上がっていた。そして、更に情報を引き出そうとする。

「よくわからないですね、どんな状況でそんな事が起こると?」

「ここからがあたしの推測の恥ずかしいところで……ロケット団構成員との小競り合いの中で、被害者は知ってはいけない何かを知ってしまったんじゃないかなと……まあこれは、ロケット団が秘密主義の組織だと聞いてあたしが勝手に推理しただけなんですけどね」

コロンボはふふふ、と笑ってから「どう思います?」と、サカキにパスを出す。

サカキは一瞬間の中を空にし、自身がジムという城と手塩にかけて育てた息子のような存在を一度に消された悲劇の男だということだけを思い出しながら答える。

「コロンボさんほど頭の切れる人が、物取りの犯行ではないとした以上、可能性はなんだってあるでしょう。私がただ望むのは、物取りだろうがロケット団だろうが、犯人が逮捕されて、トキワに平和が戻ることですよ」

コロンボは「いやほんと、全くそのとおりですなあ」とそれに返した後に、右手をサカキの前に差し出す。

「いやあ、お忙しいのにお時間取らせてしまつて。おかげさまで頭の中が整理できました」

サカキはそれを握り返して答える。

「いえいえ、こんなことで良ければ」

「はい、ありがとうございます」と、コロンボは一旦サカキに背を向けたが、すぐさまレインコートを翻してサカキの方に向き直ると「すみません、あと一つだけよろしいですか?」と言い、サカキの返答を待つより先に言う。

「事件のあつた日、サカキさんがジムから出る時には、本当に誰もいませんでしたか?」
それに関しては、サカキの中でも整理がついている事だったので、彼はなんの苦もなく答える。

「ええ、誰もいませんでしたよ」

コロンボはニヘラと笑う。

「ああ、そうですね。いやね、検死の結果、被害者が殺されたのは夜の十二時から二時頃って出ましてね。まあ犯人は殺人を犯してから短くても一時間現場に居座り続けたことになるんだがまあそんなことはどうでもいい。確かサカキさんがジムを出たのは夜の十二時を回ったあたりでしたよね」

「ええ、そうですね」

「そうですね……いやね、時間から考えると、サカキさんがジムから出る時には、いや、もしかしたらサカキさんがジムにいるときから、被害者は殺されていたかもしれない

……念の為聞いたんですよ」

ありがとうございしました。と残して、コロンボはサカキに背を向けた。

サカキがコロンボの言葉に怒るべきか、それともあつけにとられているべきかを考えているうちに、コロンボは玄関の扉を締めた。

9. 英雄

ロケット団ボス、サカキは、決して油断をしていたわけではない。

近くに起こる、ある大きな計画のために訪れたロケット団のアジトで、彼はある少年と戦った。

当然その少年は、招かれざる客であった。彼がかぶる赤い帽子は、ロケット団の服装として似つかわしくない。

どうやらその少年は、ゲームコーナーの秘密のスイッチを見つけ、アジトに侵入してきたらしかった。当然、そのスイッチには見張りがついていたらしいが、その少年は見張りを倒し、有ろう事かアジトにいたロケット団の殆どを倒し、サカキのいるボスの部屋にたどり着いた。

その少年を、サカキは武力によって追い払おうとした。彼はジムリーダーと悟られぬために別に用意しているポケモンたちを繰り出し、そして、その少年に敗れた。

サカキは愕然としながら、しかし、至極冷静にアジトを捨てた。たった一人の少年に壊滅させられたことはもちろん想定外のことではあったが、ロケット団がさらに力をつけるための最後の計画は、すでに進んでいる。それさえが成功してしまえば、ロケット

団は更に大きな、アジトと呼ぶには語弊があるほどの本拠地を手に入れる事ができるのだ。

敗走の中、サカキは考えた。その少年に、素顔を晒すことがなかった事こそが、最も大きな不幸中の幸いだ。

サカキはロケット団のボスとして活動する際に、ある幹部による変装術によつて、素顔とは全く違う顔を手に入れる。当然だ、ロケット団のボスとして活動する時に、世間にした顔であるサカキの素顔を出す訳にはいかない。そして、今回はそれで救われた。

赤い帽子の少年、彼の實力ならば、必ずジムバッジを七つ集め、八つめのバッジを手に入れるために、トキワジムを訪れ、トキワジムリーダーのサカキと戦うことになるだろう。

サカキは、それに対して複雑な心境を抱いていた。その少年の才能は、言葉では言い表せないほどに素晴らしいものがあつた、彼のポケモンは彼に懐き、彼のためにすべてを出し切ろうと力を振り絞り、その少年もまた、ポケモンたちがその力すべてを引き出すことの出来る戦術を組み立てる。

表の顔、ジムリーダーとしてのサカキは、それを嬉しく思っている。その少年はいずれ間違ひなくバッジを八つ集め、四天王、あるいはチャンピオンとも互角に戦うような、

この世に存在する全てのトレーナーの模範となるような存在になるだろう。教育者の一人として、それを嬉しく思わないはずがない。

だが同時に、ロケット団ボスとしての自らは、その少年の正義性を嫌悪しているのだ。アジトを壊滅させたその実力を疎ましく思っているし、憎らしくも思う。

あるいは、彼ほどの、その少年ほどの実力、才能、賢さを併せ持つトレーナーが、ロケット団の幹部として君臨してくれたならば、と考えてしまう。そして、それはつまり、素晴らしいトレーナーになる資質のある少年を、ロケット団という、悪の道に落とそうとしているということ。表の自分が、それを激しく嫌悪する。

その考えは、良くないのだ、むしろ、ロケット団に存在する、素晴らしい実力を持つた幹部たち、彼等が堂々と道を歩けるような、表の顔を持っていないことこそ、憤るべきなのだ。

☆

その日、タمامシシテイは大変な賑わいを見せていた。

もちろんそれは、カントーの中心街であるタمامシシテイにとって、賑わいが日常であることを差し引いてもである。

賑わいの中心は、街の中心にあるゲームコーナーだった。普段から人でごった返しているその娯楽場は、その日は中も、そしてその外にも人の波を作っている。

ジュンサーと共にそれらをかき分けながら進むコロソボは、トキワシテイのアレとは比べ物にならないと考えていた、だが、それをジュンサーに言うことは出来ない、ふたりとも人の波を泳ぐのに必死で、それどころではなかった。

タمامシゲームコーナーが、その実ロケット団のアジトも兼ねていた。と言う衝撃的事実は、まだしばらく、タمامシシティを普段以上の熱狂に包みそうだった。

タمامシゲームコーナー地下、ロケット団アジト地下四階。

ケージは、ボスがいたとされる部屋を忌々しく思いながら見回し、ロケット団というマフィアが、自分や、大多数の社会が考えていたよりもはるか大規模にカントーを蝕んでいることを実感していた。

彼の知る限り、タمامシゲームコーナーは歴史の古い建築物ではない、数年前、突如としてタمامシに出来上がった。今考えれば、それとロケット団の台頭は関連付けすることが出来るのかもしれないが、そんなことは今はどうでもいい。

これほどの大規模な隠蔽、地下四階まで続く大規模なアジトを作ることが出来る政治力。単純に考えるだけで、建築会社、労働者、役所、それらすべての人間が、ロケット

団のこの企みを隠蔽していたという恐怖。それら全てにロケット団の息がかかっていると考えるだけでも、その規模の大きさに震える。

ケージはその部屋の奥にある革張りのソファアに近づき、その表面を手のひらで撫でる。

彼はインテリアに対して詳しいわけではない、妻と家具屋に行っても何の興味もわかず、二軒目をせがまれて苦い顔をすることすらある。しかし、そんな彼ですらも、そのソファアに使われている革が、自分の家にも、警察局にも、かつて行つたことのあるジムリーダーの家にあつたものよりも高級である事を理解できた、本当に良いものは、素人にもその違いがわかるものだ。

彼は小さくそのソファアを蹴った。おそらく誰も、それを見てはいないだろうし、仮に見ていたとしても、それにむなしげな視線を投げかけるだけで、彼を非難はしないだろう。

この得も言われぬ怒りをどうしようかとケージが考えていた頃、エレベーターの扉が開き、もはや見慣れたボロボロのレインコートが目に入る。

エレベーターから降りたコロンボは、感心したようにそこらへんを物色しながら部屋に入り、葉巻を持った方の手を上げてケージに挨拶した。ジュンサーは周りの警官に挨拶して回っていたのだろうか、少し遅れてからコロンボの後についてくる。

「ケージさん、こりやあ、とんだことで」

門外漢のコロンボでも、この状況の陰惨さは理解できるようだった。

ケージは、緊張感のないコロンボの態度に力が抜け、なんとか冷静さを取り戻しながら、目を伏せて答える。

「コロンボ警部にはお恥ずかしいところをお見せした……これはある意味、カントー警察局始まって以来の大事件になるかもしれない」

「まさかこんな町中にアジトを構えるだなんて、励ますわけじゃありませんけど、ロサンゼルスで同じことがあったとして、果たして気づけるかどうか」

コロンボもまた、ロケット団の政治力に驚いていた。

そして彼はソファアを指さして言う。

「見てくださいよこのソファア、天然の革張りだ……こんなウチの署長の家にもありませんでしたよ……高いし手入れも大変だろうに、よくこんなもの置く気になれますよね」

「まったくだ」と、ケージはおそらく初めてコロンボに全面同意した。

「しかし……一体どうしてこんな事になったんです？ 彼女が言うには、一人のトレーナーがここを壊滅させたと言うんですが、まさかそんな」

「それがそのとおりなんです」と、ケージは素早く答える。

「たった一人のトレーナーが、単独でこのアジトを発見、乗り込み、壊滅させた。とても信じられないことだが、どうやら本当にそうらしい」

「へえ」と、コロンボは思い切り背を反らしながら天を仰いで、驚きを表現した。

「それどころか」と、ケージは続ける。

「そのトレーナーは、この部屋でロケット団のボスと戦い、そして勝利したという」

「なんですって!」

コロンボは信じられないと言ったふうに大げさなアクションを見せるが、ケージもジュンサーもそれを笑わない。それを動きで表すかどうかは別として、それを初めて聞いたときには、彼等も同じようなことを思ったのだから。

「するとここは、ボスの部屋だったと」

コロンボの問いに、ケージはソファアを指さしながら答える。

「まあ、これからしても、ボスや幹部などが使う部屋だつと考えるのが妥当だろうな」

ふんふん、と頷きながら、コロンボは葉巻の先端が、大分灰となっていることに気づき、振り返ってジュンサーに言う。

「あの、どこかに灰皿ない?」

緊張からか、少し脂汗をかいていたジュンサーは、それでもコロンボに切れの良い返事を返し、キョロキョロと小走りに部屋を周りながら探すが、どうやら見つけられない

ようだ。

ため息を飲み込みながら、ケージは懐から携帯灰皿を取り出して、コロンボに手渡した。すくなくとも煙に關してのマナーは、ロサンゼルスよりもカントーのほうがずっと進んでいるようだった。

「ああどうも、こりや便利ですなあ」

コロンボは楽しげにそれに灰を落とした。

「しかし、珍しいですなあ、普通灰皿の一つや二つあるもんですがねえ、ボスが嫌煙家だったんでしようなあ」

コロンボはもう一度楽しげに携帯灰皿と戯れてから、ケージに問う。

「ボスは逃げたんでは？」

「ああ、まあ、それは我々の仕事だ」

「おっしゃる通りで。しかし、そのトレーナーは英雄ですなあ。今頃新聞やテレビに引つ張りだこでしょう」

コロンボの考えは最もだったが、ケージは手を振ってそれを否定する。

「いや、そのトレーナーが英雄であることは疑いようのない事実だが、今回は事が大きすぎるから強力な報道規制を敷いている。そのトレーナーが何者であるかは警察の中でもごく限られた人物しか知らないし、絶対に外には漏らさない」

「なるほど、それは懸命なお考えですなあ、その判断を知ることが出来ただけでも、私がカントーに研修に来た甲斐があるというものです」

ケージはコロンの称賛に複雑な表情を浮かべながら頷く、確かに大きく、そして懸命な判断だが、そこに至るまでのすべてが、カントー警察局の汚点だった。

「あ、そうだ。ボスの人相は取れたんで？」

ケージはそれに苦い顔をする。

「一応人相書きは作ったが……ほぼほぼ無意味と言っていていいだろうな。顔を変えていないとは思えん」

「それでも、性別とか、体格くらいはわかりそうなもんでしょう？」

「性別は男でほとんど間違いなと思うが……体格はどうだろうな、その気になれば、スーツにも靴にもいくらでも仕込める」

「確かにそうですなあ……こう言っていていいもんかどうか分かりませんが。ロケット団のボスはとても頭の良い人物らしい。慎重で、狡猾で、大胆だ。負けたというのも、あるいは本気ではなかったのかもしれない」

暴力組織の首魁を褒め称えるその発言は、咎められてもおかしいものではなかった。事実、その発言を聞いたジュンサーは、ケージの怒号を覚悟して身をすくめる。

しかしケージは「そういうことでしょう」と、渋い顔をしながらもそれを肯定する。こ

の大都会のど真ん中に、ここまでのアジトを作られていたと言う衝撃は、ケージのプラ
イドを激しく傷つけていた。

10. 布石

カントー地方で最も栄えているタمامシシティには、当然ながらそれにふさわしい料理を提供するレストランも存在している。大食い大会で街を賑やかにする大衆食堂だけがタمامシの味ではない。

レストラン『アルコバレーノ!!!』は、海外の評論家からの評価も高い、カントーのみならず、他地方からのリピーターも多数。カロス地方の大女優カルネがカントーを訪れたときも、女優仲間を引き連れて来店した実績を持つ。

トキワジムリーダーのサカキは、『アルコバレーノ!!!』で優雅な昼食を楽しんでいた。食に対して狂人のようなこだわりがあるわけではないが、少なくともこの店に来れば舌に合わないものを食べることはないし、満足の行く酒もある。

特にあんなことがあった後だ、食事くらい、冒険のない選択をしたかった。

「お客様！ 困ります！」

レストラン『アルコバレーノ!!!』のフロントスタッフは、不意に現れた中年男に辟易していた。

とてもではないが、店内に入れていい存在ではない、ボサボサのクセ毛に、薄汚れたレインコート。ドレスコードの知識がない人間でも、星付きのレストランにふさわしくない男だと思うだろうし、本人だってそれを自覚してそうなものだ。

しかし、その男は執拗に店内に入ることを望んでいた。

「あたしやここに飯を食おうってんじゃないんだ、中にいる人に二、三質問できればそれでいいんですよ？」

困り果てたスタツフは、ついに総支配人に助けを求めた。

しばらくしてから現れた年配の支配人は、コロンボを一目見るなり表情を引き締めながら問う。

「お客様、いかがしましたか？」

コロンボはやや高圧的に言う。

「いやね、あたしサカキさんに少し聞きたいことがあつてきたんだ。ロス市警のコロンボってものなんですかね……まあここでロス市警の名前出しても何の意味もないことはわかってるんですが……まあ、もしサカキさんがいるならちよつと通してもらえらうに聞いてもらえないですかねえ」

ロス市警、という言葉に支配人は一瞬戸惑いを見せたが、すぐさま「少々お待ちを」とコロンボに背を向ける。しかし、あんな男が警察官とは、ロサンゼルスは何という街な

のだろうか、彼はロサンゼルスに対する偏見を持った。

「サカキさま」

デザートを待っていたサカキは、顔なじみの支配人にそう呼ばれ、顔を上げる。

「ロス市警のコロンボと名乗るお方が、二、三サカキさまにお話を伺いたいと」

その名前を聞いて、サカキが小さくため息を吐いたのを、支配人は見逃さない。

「追いつ返しでしょうか？」

「いや、一旦席を外そう。中に入れる服装じゃないだろうか？」

サカキの氣遣いに支配人は感服しながら「もうしわけありません」と頭を下げる。

「いや何、厄介なファンに気に入られてね」と、サカキはスーツを着直しながら席を後にした。

「コロンボさん」

レストランのフロント、葉巻を燻らせながら突っ立っていたコロンボを発見し、サカキは彼の名を呼びながら距離を詰める。

「ああ、サカキさん、どうも」

二ヘラと笑いながら手を上げるコロンボに、サカキは苦い顔をしながら言う。

「コロンボさん、流石に困りますよ」

「ええ申し訳ありません、あたしも失礼だとは自覚しています……ですがね、どうしてもお耳に入れておいたほうがいいことがあります」

コロンボは、思い出したかのように唐突にフロントスタッフに「すみませんね、席外してくれる？」と詫びを入れ、サカキに促される形で彼がその場から一旦消えるのを確認してから言う。

「実はですね、昨日、ロケット団のアジトがあるトレーナーに襲撃されまして、ほとんど壊滅したんですよ」

あまりにも古い、古すぎる情報に、サカキは乾いた笑いを交えながら答える。

「知っていますよそんな事、今はタمامシ中、おそらくはカントー中でその話題でもちきりでしょうな、まさかそれだけを言うためにここに？」

「いやね、あたしが聞きたいのは、サカキさんはね、ロケット団のボスが誰か知っているんじゃないかと思ひましてね」

サカキは背筋を凍らせながら、それでいてそれを表情に出すことはなく「どういうことですか？」と、不意の質問に驚いたように言う。

コロンボは葉巻の煙を踊らせながら答える。

「あたしロケット団のアジトを見てきたんですよ、そりゃあ素晴らしいもんでした。ゴ

ミひとつ無く、床はきれいに磨かれ、本革のソファの手入れも行き届いてた」

サカキがそれに何も返さないのを確認してから続ける。

「あたし見てのとおりイタリア系でね、知り合いを辿っていけば、マフィアのボスにも行き着くんですよ。だからあたしにはわかるんだ、組織が強ければ強いほど、大きければ大きいほど、それを束ねるボスってのは、相応なカリスマ性がないといけないですよ……血の気が多くて、跳ねつ返りの強い若者をまとめるのは、あたしらみたいな大人をまとめるよりも遥かに難しいでしょう？」

なるほど、と、サカキは頷く。

「道徳的に賛同はしにくいですが、言っていることの意味がわからないわけではない」

コロンボもそれに頷いて続ける。

「カリスマってのはね、隠そうと思つて隠せるもんじゃないんだ。生きていく上で誰が必要としている能力で、皆それを求めてる。だからね、マフィアのボスってのは、時として信じられないような表の顔を持つていることもある。彼がマフィアのボスだと知らなければ、素晴らしい人格者だと思つてしまうほどにね」

なるほど、と相槌を打ちながら、サカキは居づらさを感じた。それは間接的にロケツト団のボスである自分を褒め称えているのだが、それに対する反応をするわけにはいかず、むしろここでは、ある程度それを嫌悪するような表情を作らなければならないから

だ。

しかしそれでも、主張したいことはある。特に、ロケット団というものを深く理解しつつあるコロンボに対して、どうしても主張したいことが。

「ジムリーダーもね、似たようなものですよ」

「と、いうと？」

「ポケモントレーナー、特にジムバッジを集めるような若者はね、大抵の場合は、才能があつて、ただ強いだけ。倫理観や人格はまだまだとてどもとてども。彼等を導く我々ジムリーダーも、強烈に彼等を引きつける人間性が無いと成り立ちはいけませんよ、従うべきカリスマが倫理と人格を求めれば、自然と彼等も、それらを持つようになる」

「はあ、なるほど……キョウさんも同じようなことを言っていましたなあ」

「そういう意味では、ジムリーダーという職と、マフィアのボスというのは、共通点が多いのかもしれない。もちろんそこには、倫理観の溝がありますよ」

「ええ、あたしもそう思いますよ」と、サカキに同意してから、コロンボが続ける。

「だからあたし思つたんだ、もしかしたらサカキさんの知っている誰かが、ロケット団のボスかもしれないとね……だから心あたりがあるかどうか聞きに来たんです。あなたのほうが、そういう人間と付き合ひがありそうですからね」

サカキはコロンボの言葉を鼻で笑う。

「わかりませんなあ、大体、それほどの組織をまとめ上げ、未だにその正体がバレていない人間が、私相手にそれを見せるとは思えない」

コロンボは笑って答える。

「おっしやる通りで。まあ、万が一ということがありますからな。あたしら警察つてのはね、万が一をひとつずつ潰していくのが仕事なんです。それでは、これで失礼します、まだお食事の途中でしよう?」

「ええ、これからデザートですよ」

「デザートですか、それはいい……あ、デザートワインにはモンテフィアスコーネがおすすめてですよ。アレは最高のデザートワインだ」

そう言つてサカキに背を向けたコロンボは、やはりサカキの想像通りにレインコート
を翻し、指を一つ立てる。

「ああ、すいません、後一つだけよろしいですか?」

サカキは笑いの表情を作つて答える。

「一つだけじゃないんじゃないですか?」

コロンボは照れながら言う。

「いやあ何もかも見抜かれているようで、実は二つほど……」

「まあいいでしょう、どうぞ」

「はい、一つはですね、今度開かれるエキシビジョンマッチについてなんですが……あたし色々調べたり聞いたりしたんですが、どうやらサカキさんとエリカさんの対戦はとても人気のあるものなんですなあ」

「ええまあ、お互いにジムリーダーですからね。普段対戦することがないので」

「それで、出過ぎたお願いなんですけど、チケットを何とか手配しては貰えないですかねえ……あなたが戦っている姿を生で見たとカミさんに言えば、あたし夫としての尊厳を回復できるというものでして」

随分と図々しい願いだな、とサカキは思ったが、それは叶えられない願いではない。

「まあ、いいでしょう。関係者席にご招待しますよ、お付きのジュンサーさんも一緒にね」

コロンボはぱつと表情を明るくさせる。

「本当ですか!? いやあ嬉しいですねえ、彼女も喜ぶでしょう」

「あなたが来るとなると、私も気が抜けないですなあ」と、サカキはおどけてみせてから「それで、もう一つは？」と問う。

「ああ、そうそう……昨日は素晴らしい晴天でしたなあ」

サカキは首を傾げながら「ええ、そうでしたね」と答える。一瞬なにかの引掛けかと疑ったが、昨日が晴天であったことには何の間違いもない。

「あたしこのタマムシって街を気に入りましたねえ、もう少し観光をしてみたいんですが。サカキさんは、例えば昨日はどこで何をしてらしたんで？」

これか、と、サカキは身構えた。そして、このコロンボという男が、自分をロケット団のボスだと疑っていることを確信する。

そして、自分がこの知恵比べに勝利したことに内心ほくそ笑みながら、それでいて一瞬だけ何かを思い出すように頭をひねるのも忘れずに答える。

「昨日はシルフカンパニーの研究員の方とデイスカツションをしたんですよ、少し白熱してしまつて、一日の殆どを使つてしまいました」

ほう、と、コロンボは感心したように頷き、灰皿を葉巻で叩く。それが動揺の動きであることを、サカキは見抜き、畳み掛ける。

「興味がお有りなら、彼女の名刺をお渡ししましょうか？ 面白い話が聞けると思いますよ」

「ああ、お願いできますか」と、どこか神妙な顔で答えたコロンボに、サカキは手際よくスーツから名刺入れを取り出し、その中にある一枚を手渡す。

「サカキがよろしく言っていたと伝えておいてください」

ヤマブキシテイの中心に巨大なビルを構えるシルフカンパニー本社。

カントー地方で最も大きな企業と言っても差し支えないその会社は、主にポケモンとの生活に関連する商品をいくつも開発し、販売している。

「こちらが、戦闘中にポケモンの集中力を高める道具になっています。集中することで技の精度がまし、相手の急所を狙いやすくなります」

アテネ、と名乗ったシルフカンパニーの研究員は、応接室のソファーに座り込んだコロンボとジュンサー相手に、シルフカンパニーの商品を並べて、それらを手に取りながら解説していた。白衣のよく似合う美人であったが、スラスラと商品に対する説明が出てくるのは流石といったところだ。

「もちろん公式のバトルでは使用できませんが。野生のポケモン相手の戦いを有利にするための使用が考えられています」

コロンボの横に座るジュンサーは、それらの商品の説明に表情豊かな反応を見せているが、対するコロンボは難しい顔でウンウンとうなずくだけ。

もう暫くの間、商品の説明を受けていた。確かにサカキの名刺を出して見学に来たといったのはコロンボの方であるが、まさかここまでペースを握られるとは思っていなかった。

アテネが白衣から取り出した次の商品の説明に入るより先に、コロンボが先手を取って問う。

「あの、すみません。実は一昨日のことを聞きたいんですが……よろしいですか？」

アテネは商品を机に並べながら答える。

「あら、まるで警察のようなことを仰るのね」

「ええまあ……一応警察なもんでね」

「あら本当ですよの!?! サカキさんのお知り合いだとは聞いていましたけどまさか本当に警察だなんて……でも海外からいらしたのでしょうか？」

「ええまあ、あたしロス市警のコロンボって言うんですがね……一応殺人課の刑事やってます」

「まあ殺人課だなんて、私そんな人には初めてお会いしますわ」

「ええまあ、この国での捜査権は無いんですがね……一つどうしても聞きたいことがあって」

「プライベートのこと以外なら何でもお答えしますわ。なんとと言ってもロス市警の刑事さんですもの」

手を合わせて嬉しそうに言うアテネに、コロンボは脱力的に笑いながら問う。

「実は一昨日のことなんですがね……あなたサカキさんとデイスカッションしてました

「？」

アテネはその質問に「はい！」と即答したものの、念のために懐から手帳を取り出し、確認してから更に答える。

「ええ、間違いありませんわ。確かにおととい、サカキさんと少しお話を」

コロンボは懐からメモ帳を取り出し、それに記入しようとしたが「あれ」と、立ち上がってレインコートのポケットを叩いて、難しい表情でジュンサーの方を見る。

すぐさま事態を察したジュンサーは「どうぞ！」と、胸ポケットに挿していたボールペンをコロンボに差し出した。

コロンボは再びソファアに座って言う。

「少しですか？ 一日中とサカキさんは言っていましたか」

「いえ、少しというのは議題の内容の話ですわ。お恥ずかしいお話ですけど、私もサカキさんも白熱してしまって……暗くなるあたりによりやく解散しましたの」

何やらメモしながら、更にコロンボが問う。

「差し支えなければ、白熱の理由を確認したいんですが」

「申し訳ありませんが、それは企業秘密ですので……強いて言うなら、今新しく開発しているボールについての倫理観について、と言うことしか」

「はあ、なるほど」と、コロンボはそれをメモして「いやあ、今日は本当に、ありがとう

「ごさいました」と、席を立つ。

「あら、まだたくさん商品がありますのに」

アテネの笑顔に、コロンボは手を振る。

「いやあ、あたしもう頭がこんがらがっちゃって、申し訳ないですが、ここで失礼する
ことにします」

そう言つてそそくさと応接室を去るコロンボと、それを追いかけるジュンサーの背
中に、アテネはこれまでとはニユアンスの違う笑みを投げかけていたが、誰もそれに気づ
くことはなかった。

11・崩壊

ロケット団のボス、サカキは、その光景を、未だに信じていることが出来ないでいた。

確かに、ロケット団のボスとして戦うときには、使い慣れているじめんタイプのポケモン以外のポケモンを使うこともある。だが、だからといって戦力として困ったことなど一度も無いし、勝たなければならぬ戦いには必ず勝利してきた。

だからこそ、この光景が信じられない。

初めて戦う相手ではない、むしろその相手は、警戒しなければならない相手として認識していたはずだ。

ならばどうして負ける。どうして負けなければならない。

すべてを失い、気絶したポケモンをボールに戻したサカキは、自分と向き合う赤い帽子の少年を見た。彼の傍らに立つピカチュウは、まだ気を抜かずに頬袋に電気をためている。

見誤っていた、と、彼は後悔していた。

その少年の実力を、見誤っていた。

ロケット団のボスとしてではなく、世界最高のトレーナーの一人、トキワジムリー

ダーのサカキとしてその少年に向き合い、叩き潰し、正体を知られるより先に消すべきであったのかもれない。

だが、それしか正解がないと知っていても、自身が、その選択をできたかどうかはわからない。

その少年が見せる輝きは、失わせるのにはあまりにも惜しいと、世界最高のトレーナーは思うだろう。

あるいは、と、サカキは思う。

あるいはアポロがこの場にいれば。

しかし、その後悔はもう遅い。戦力を失い、目の前のトレーナーに為す術のないロケット団の象徴は、その場を取り繕い、相手の良心に身を任せて、その場から逃げるこゝとしか出来なかった。

☆

ロケット団によるヤマブキシテイ占拠、そしてシルフカンパニー乗っ取り、それは、ロケット団の全てをかけた、おそらく悪の組織と考えられる存在がなし得ることが出来る、最も大きな悪巧みだっただろう。目当ては世界企業シルフカンパニーの経済力だけ

ではない、彼らが持つ世界最先端の技術力、それこそがサカキの狙い。

シルフカンパニーが開発を進めているマスターボール、ポケモンの意志など関係無く、必ずそのポケモンを捕らえることが可能な、科学という悪魔が作り上げた結晶こそが、彼の狙いだった。

かつて、愚かな科学者が作り上げた人造のポケモン、シルフカンパニーが作ったポリゴンとは比べ物にならないほどの傑作、強すぎるがゆえに、人の元に降らなかつた最強のポケモン、ミュウツーと呼ばれるそのポケモン、彼はそれを捕らえ、世界最強のトレーナーになると共に、世界で最も影響力のある人間の一人にならんとしていた。

完璧な作戦だった、ロケット団は一夜にしてヤマブキシティを事実上占拠し、シルフカンパニーも落とした。この作戦は、後にカントー警察局のテロ対策マニュアルの中で、最も重要な事件の一つとして掲載されることになる。

しかし、結果から言えばその作戦は失敗に終わった。ロケット団幹部の一人、アポロの部隊が担当するはずだった西口ゲートから二人のトレーナーの侵入を許し、彼等の手によってシルフカンパニー内の構成員が全滅、トレーナーのうち一人は幹部が撃退したものの、もう一人が幹部をも撃破し社長室に侵入。会談を進めていたロケット団ボスとの一対一に勝利し、ロケット団を撤退させた。

奇しくもそのトレーナーは、ロケット団アジトを壊滅させたトレーナーと同一人物

だった。

ロケット団のボスト、多数幹部は警察の包围網を突破したものの、力もなく、逃げるアジトも失っていた大多数のロケット団構成員はその大半が検挙され、事実上、ロケット団は瓦解した。

☆

シルフカンパニー十一階、社長室。

ソファーに座る社長と向き合うケージは、ロケット団アジトを訪れた時に考えた彼らの脅威について、更に考え直す必要があると考えていた。

「つまり」と、ケージは一旦呼吸を置いてから言う。

「ロケット団は、数年前からシルフカンパニーと事実上の提携関係にあったと？」

社長は、額の脂汗をハンカチで拭いながら答える。

「結果的には、そういうことになります。しかし、我々もはじめから彼らをロケット団だと知っていたわけではない。彼らの持っていた技術と人材を知れば、どの会社だって飛びついたでしょう」

ロケット団襲撃についての事情聴取中に、社長の口から語られたのは、とんでもない

真実だった。

ポリゴン、というポケモンがいる。シルフカンパニーが作り出した人工のポケモンで、際立った強さがあるわけではないが、パソコンとパソコンの間を電子として移動することの出来る強みのあるポケモンだ。

そのポケモンを開発するチームに、ロケット団の息がかかった団体があったと、社長は語った。

「その団体がロケット団の管轄下にあると気づいたのは？」

「マスターボールの開発が始まったあたりで、ロケット団のボスと幹部達が我々と接触を求めてきた、その意味に気づく頃にはもう遅く、我々の技術は、ロケット団の手中にあっただんです」

「どうしてその時に、我々警察に協力を求めなかったんです？」

憤りながら、しかしそれを上手く隠そうとしながらケージは問う、しかし、体をビクつかせた秘書の動きを見るに、隠しきれてはいないようだった。

社長は目を伏せながら答える。

「ロケット団は、マスターボールの完成をもってシルフから手を引くと……彼らを信じた我々が愚かだということは理解していますが、社の信用と、技術を人質に取られ、同意することしか出来なかった」

ケージは背もたれに体重を預けながら天を仰いだ。社長の気持ち、が理解できないわけではないが、ロケット団よりも信頼されていなかったという点で、腑に落ちないところはある。

次は、何を質問すればいいのだろうか、できれば、感情を揺さぶられることのない答えが返ってくるかと確信できる質問がいいのだが、果たしてそんな物があるだろうか、と考えていた時「刑事部長」と、もう聞き慣れた声、が彼を呼んだ。

ジュンサーを連れて社長室に入ってきたコロンボは「いまお時間よろしいですか?」と、ケージに問う。

ケージは少し難しい顔をしながら「彼はロス市警から研修に来たコロンボ警部です。訊あつて、トキワジムでの放火殺人事件の捜査に協力してもらっています」と、社長に彼を紹介する。

立ち上がって右手を出した社長に「はいどうも」と適当に握手を返し、ケージに言う。「ケージさん、捕まえたロケット団構成員の中に『どくどくのキバ』を覚えたゴルバットを使えるトレーナーが居るかどうか調べてはくれませんか? あたしどうしても、あの事件がロケット団員によるものだと思えて仕方がないんですよ」

ケージは「失礼」と、社長に言うから立ち上がって言う。

「そんなことはもうとつくにやっているよ、今の所、捕まった構成員に高レベルのゴル

バットを所持しているものはいなかった。ズバットならば何人か居たんだがな」

「さすが刑事部長ですなあ、判断が早い。しかし、これだけ捕まえた構成員の中にも居ないと言うのは、肩透かしですなあ」

ケージも似たようなことを思っているのだろう。コロンボの言葉に力なく頷く。

しかしその時、思わぬところから「あの」と、声が上がった。その方に二人とジュンサーが目を向けると、社長の傍らに立つ秘書が、恐る恐る彼らを見る。

「私、心当たりがあります」

「心当たりとは？」

「その……ロケット団のゴルバットにです」

「そうだ」と、社長も声を上げる。

「私にも見覚えがある」

コロンボはメモを取り出し、ジュンサーから素早く差し出されたボールペンを手にとった。

「どこで見たんで？」

「アポロ、と呼ばれていた幹部の少年が、いつも傍らに連れていたんです」

秘書はそう答え、それを思い出して身震いしながら続ける。

「とても怖いポケモンだったんです……今にも私達を襲ってきそうで……私、怖くて

……」

コロンボがケージに問う。

「幹部となれば『どくどくのキバ』を使える可能性がありますよね？」

「ああ、大いにある」

「そのアポロってトレーナーは、捕まってるんで？」

「リストには無かったな、上手く逃げられたか」

「いや、それが、今日はその人、居なかったんです」

秘書の言葉に、コロンボとケージは再び彼女を見る。

「居なかった？」

「はい、いつもはボスの傍らにいたんですけど、今日はボス一人でした」

「妙な話ですなあ」と、コロンボは首をひねり「ああ」と、ケージも同意する。

「だが、トキワジムの事件の重要参考人であることは変わりないだろうな」

「その通りで」

ニヤリと笑ったコロンボは「ああ、すみません、あっちの方で二人でお話できませんか？」と、部屋の隅を指さしながらケージに問う。

「ああ、構わないよ」と、ケージはそれを承諾し、ジュンサーに二、三言指示を出してからコロンボの後を追う。

部屋の隅に移動したコロンボは、ケージに問う。

「あのですね、今回の事件を解決したのも、ロケット団のアジトを潰したトレーナーだつてのは、本当なんですか？ あたしやどうしても信じられなくて」

その話題に、ケージは声を潜めて答える。

「私も信じられないが、間違いなく真実だ。会った私が言うんだから間違いはない」

「今回も報道規制を？」

「ああ、要請した。そのトレーナーに対する情報は何一つ漏らしておらん、もつとも、そのトレーナー自身が名声を欲しがれば我々に止めるすべはないが」

「今回もボスの似顔絵は取ったんで？」

「取った、だが期待薄だな、アジト襲撃のときとは顔を変えているし、社長の話によると、会うたびに少しづつ顔を変えていたようだ。相当腕の立つメイク師が裏についてるらしいな」

コロンボはうーんと唸った後に「わかりました」と答え、更に言う。

「あたし下の方に用事があるんでお先に失礼します」

「ああ、わかった。今日は長い日になる」

「違いありませんな」と、コロンボは答え、手を振ってジュンサーを呼び、その場を後にした。

☆

シルフカンパニー四階、研究室を訪れたコロンボとジュンサーは、担当の刑事に軽く挨拶をしてから問う。

「実はね、アテネって研究員の方と話をしたいんだけどね」

その階と二階五階では、ロケット団に占拠された際に拘束されていたシルフカンパニーの社員の大半が事情聴取を受けていた。刑事は「わかりました」とコロンボを疑うこと無く答え、一旦その場から消える。

「やっぱり昨日の今日ですから不安ですよね」と、ジュンサーは心配そうに言うが、コロンボは「そうね」と、そっけない。

やがて担当の刑事が駆け足で戻ってくる。

「アテネと言う研究員ですが、今日は姿を見せておらず、連絡も取れないようです」

ジュンサーは「え」と声を上げて取り乱すが、コロンボは至極冷静に「そうだと思っただ」と返す。

「まだ何人かそういう人間がいるだろうか？」

刑事は頷いて答える。

「はい、数人ほど」

はあ、と、コロンボは深い溜め息をつき。ジューンサーもその様子から「まさか」と、気づく。これまでシルフカンパニーの研究員として働いていた人間が、ロケット団襲撃の日に申し合わせたように会社を休み、消息を絶つ。その意味するところは。

「アテネさんもロケット団の人間だったなんて……」

コロンボは頭を抱えながらそれに答える。

「研究員を構成員として組み込んだのか、それとも構成員を研究員として潜り込ませたのかはわからないが、用意周到な組織だね」

そしてさらにコロンボは刑事を指さして言う。

「それ、刑事部長には報告してるよね？」

「はい」と、刑事が返したのを確認してから、コロンボは唸る。

「さて、こうなると振り出しに戻るといいうわけだ、あたしも、あの人もね」

あの人が、が誰を意味するものかわからず、ジューンサーは首を傾げた。

12. 挑戦

ロケット団によるシルフカンパニー襲撃時間から二日後。

タمامシシテイ、タمامシドームには、トキワジムリーダーサカキと、タمامシジムリーダーエリカとのエキシビジョンマッチの観客が、数多く来場していた。

トキワジムのサカキ、タمامシジムのエリカ、どちらもカントー人ならば知らぬものなどいない有名人だ。サカキはジムリーダーきつての実力者として知られ、エリカはまだ若いが落ち着きのある戦いぶりと素晴らしい人間性で知られる、強い女性の見本のよきな存在だった。

観客達は、サカキがどのような戦いを見せるのか、期待と、わずかばかりの恐怖を感じていた。

ここ数日、カントーは揺れに揺れていた。ロケット団によるシルフカンパニー襲撃に、タمامシシテイのロケット団アジト壊滅、そして、それら悲劇の始まりが、トキワジムに起こった悲劇であることを、彼等は忘れていない。

彼らの殆どは、トキワジム改修のための募金箱にそれぞれの気持ちを込めていたし、一刻も早く犯人が捕まることを望んでいる。

そして彼等は、悲劇による責任を強く感じているであろうサカキが、それでも強くあ
ることを望んでいた。不安定なこの世の中に、信じることの正義があることを肌で感じ
たかった。

だが、その逆もありえた、この数日、サカキにかかっていたであろう精神的圧迫は並
のものではなかっただろうと彼等は考える。だから、あり得るのだ、最強のジムリー
ダーサカキが、思わず目を覆ってしまいそうになるほど稚拙な試合運びをする可能性
だって、無いわけではない。

それでも彼等は、サカキを信じたかった。

☆

『タネマシンガン』！

対戦場では、巨大な花に体がついたようなポケモン、エリカの繰り出したラフレシア
が、花から幾多もの種を打ち出す。

その対面に立ちはだかっていたサカキのサイドンは、それを全身で受けながら、少し
表情を歪ませた。岩とじめんタイプのサイドンにとって、草タイプの攻撃である『タネ
マシンガン』は、効果が抜群だった。

しかも、攻撃はそれだけにとどまらない。打ち込まれた種からは、すぐさま芽が生え、意思を持ったかのようにサイドンの体を締め付け、ダメージを奪った。

それは、草タイプの大技『ギガドレイン』だった。体力を奪い、更にその体力を攻撃者であるラフレシアに還元する、いかにも草タイプらしいクレバーさを持った技。

じつくりと、しかし確実に体力を奪われ、サカキのサイドンは地面に膝をついた。これ以上は無理だと、サカキは彼をモンスターボールに戻す。

満員の観客席からは悲鳴が上がった、これで、サカキの残る手持ちは一体、対してエリカには『ギガドレイン』によって体力を回復したラフレシアと、もう一体を残している。

サカキがどれだけ強いトレーナーであろうと、エリカほどの実力を持つトレーナーが相手では、持ち得る戦力の数はそのまま勝敗に直結しかねない。

しかし、サカキは観客のそのような不安を意に介さず。最後のポケモンを対戦場に放り込む。

繰り出されたのは、じめんタイプの最終進化系、ニドクインだった。女王の名がつく割には小さな体格の彼女は、現れるやいなや『すなあらし』を巻き起こす。

これによって草タイプ最大の大技『ソーラービーム』は威力が抑えられる。

窮地に追い込まれながらも、単調にならないサカキの戦略感に、観客達は尊敬心を抱

く。ニドクインはじめんタイプでありながらどくタイプも複合するために、草タイプとの相性が悪いわけではないが、それでも『ソーラービーム』を食らってしまったら、勝負の大勢が決まってしまうかねないことによく気づいたのだ。

『やどりぎのタネ』

しかし、エリカもまた深い戦略感を持ったトレーナーである。

指示されたラフレシアは再び花びらから幾多もの種をニドクインに撃ち出し、ニドクインの体に打ち込まれたそれは発芽し蔓状になって彼女に寄生する。

だが、それは『ギガドレイン』のようにすぐさま効果を発揮する技ではなかった。時間をかけてじつくりと対象の体力を奪い、それを味方陣営に還元する技。つまりエリカは、この技によってラストのポケモンに保険をかけたのだ。

状況は未だ不利だが、サカキは淀みない指示をニドクインに与える。しかし、それは驚きの技だった。

『ごごえるかぜ』

サカキの指示によって大きく口を開けたニドクインは、そこから凍てつく風を作り出して、ラフレシアに攻撃した。

観客達はどよめき、そして歓声を上げた。『ごごえるかぜ』は草タイプであるラフレシアが苦手とするこおりタイプの攻撃で、効果は抜群だ。

だが、その技をニドクインが使うことが出来ることはあまり知られていない事実だった。ニドクインと言えば、角を使った『つのドリル』や、じめんタイプ最強の攻撃『じしん』などの豪快な技で知られる。良くも悪くも小回りの利く売人向けの技『ここえるかぜ』はイメージしにくい。

しかし、ニドクインのその攻撃は、高い精度を持って、ラフレシアに大ダメージを与えた。『ギガドレイン』や『やどりぎのタネ』で体力を回復していたとは言え、ラフレシアは弱点による攻撃には耐えることができず、地面に崩れる。

エリカは素早くそれを手持ちに戻し、最後のボールを対戦場に放り投げる。現れたのは、エリカの手持ちのエースであるウツボットだった。

まだ勝負はわからない、と、ドームにいるサカキ以外の人間たちは思っていた。どくタイプを複合しているウツボットにはニドクインの毒攻撃は抜群にならない。この洗練された勝負は、まだまだ続くのだと。

だが、サカキだけはそうではなかった。彼は右手を上げてニドクインに指示を出す。

『ふぶき』

ニドクインは、角からまばゆい光を放ちながら、対戦場に、雪と、それらをウツボットにぶつけるための風を作り出した。

そしてそれは、サカキの思うままにウツボットに襲いかかり、つるによる彼の抵抗を

あざ笑うかのように、彼を氷漬けの彫像に仕上げる。

その攻撃が『ふぶき』だとわかった観客達は、大歓声を上げた。それはこおりタイプ最強の大技、草タイプのウツボットに耐えられるわけがない。ニドクインが『ふぶき』を使うことが出来る驚きは、その興奮にかき消されていた。

だがもちろん、その技には弱点もある、大きなダメージを与える大技だが、相手に命中する確率が他の技に比べて低いのだ。『れいとうビーム』ならば命中率も高いが、それではエリカのウツボットは落とせなかつただろう。

だから彼等は、サカキがこの大一番に博打に出て、それに勝つたのだと興奮していた。その技を使うことの出来るニドクインの器用さ、それをここで使ったサカキの精神力、そのどちらにも、惜しめない賛辞が与えられるべきだった。

対戦場に巻き上がっていた『すなあらし』が、ニドクインの『こここえるかぜ』によって凍った水分をまとい、まるで『あられ』のようになっていた事に気づいたのは、彼等の興奮が冷めて、もう少ししてからだった。

☆

エキシビジョンマッチを終え、記者会見、インタビュを終えたサカキは、控室のソ

フアーにぐったりと体を預けながら、天井を見上げていた。

負けるわけにはいかなかった。このエキシビジョンは、トキワジムリーダーとしての自分が健在であることを世間に知らしめるには十分なものであり、負けてしまえば、実質的に多くの地位を失いかねなかったのだ。

これで、トキワジムリーダーサカキはしばらく安泰だな、とサカキはホツとしていた。シルフカンパニー襲撃失敗によって、ロケット団はほとんど壊滅状態になった、ロケット団のボスであるサカキは、暫くの間消えるだろう。

だが、ロケット団が解散したわけではない。ロケット団のボスであるサカキは、トキワジムリーダーとしてのサカキとしてまだ生きている。その限り、ロケット団の解散はない。いずれ必ず復活することが出来るだろう。確かに数多くの構成員を失ったが、幹部の多くは失っていない。秘密裏に事を進めるには年月がかかるだろうが、頭数を揃えることはそう難しくないだろう。ロケット団を作ったときのように、事を進めればいいのだから。

ロケット団を解散するなど、考えられないことだ、世界の征服まで後一步のところまでこぎつけたのだ。あの快感を、興奮を、忘れることはできないだろう。

サカキはソフアーから身を起こし、鏡で自らの表情を確認しようとした。その時、控室の扉をノックする音が聞こえた。

「誰です」と、サカキは扉の向こうに問うた。大会関係者だろうか。

しかし、その向こう側から聞こえてきたのは、忌々しくも聞き慣れたあの声だった。「あたしです、ほら、コロンボですよ」

サカキは、キツと目をすわらせた後に、この表情でコロンボを迎えるのはまずいと、鏡の中の男が表情を緩めるまで待った。そして、その表情が激闘を終えたジムリーダーのものになったのを確認してから返事をする。

「ああ、コロンボさんですか」

予測していなかったわけではない、むしろ、これこそがコロンボの狙いだったのだろうとサカキは思っていた。このエキシビジョンのチケットを願ったのも、この接触のためだろう。

「開けてもよろしいですか?」

「ええどうぞ」

サカキの返事から間髪入れず、コロンボは控室の扉を押した。そしてドアを開けっ放しにしたまま、にへらと笑いながら握手を求め、サカキがそれに応じてから言う。

「いやあどうも。激闘でしたなあ……あたしすっかり感動しちゃって、カミさんがあなたの事をあんなに気に入っていた理由がわかりましたよ。ありやあ素晴らしい戦いでした、席をとっていただいて本当に感謝しています」

それは、コロンボの本心だった。

「ありがとうございます。あんなことがあった後ですから、自分自身、ちよつとナーバスになっていた所もあったので、ああいう形で結果が残せてよかったですよ」

「いやあ本当に素晴らしかった。カミさんに伝えるのが今から楽しみですよ……しかし、ニドクインですか？ ああの緑色のポケモンがあんなに素晴らしい『ふぶき』を作り出したのには驚きましたなあ。一緒に来ていたジュンサーくんに聞いたんですがね、あの技はああいうポケモンには難しいんじゃないですか」

「ニドクインは器用なポケモンで、いくつもの素晴らしい可能性を持ったポケモンですからね。それでも『ふぶき』の習得には苦労しましたが、それが無駄な苦労ではないことは、わかるでしょう？」

「ええ全くそのとおりで」と、嬉しげに言ったコロンボは、レインコートのポケットに手を滑り込ませた。

何かが来るか、と、サカキは気持ちを身構えたが、そこから取り出されたのは二つのモンスターボールと、一本のサインペンだった。

「実は、もう二つばかりサインをお願いしたいんですよ……昨日カミさんに国際電話でサカキさんのことを言ったらね、あたしの二人の甥っ子もサカキさんの大ファンだってんで……あんな激闘の後で失礼は承知なんですが」

机の上に置かれたそれらのボールを、サカキは手に取る。

「構いませんよ、サインはいつでもと言いましたしね」

言わなければよかった、と思いつながらサインを書く。あの言葉のせいでコロンボにいつでも会う口実を作られている。慣れているはずなのだが少し手が震えて時間がかった。

コロンボはそれを待ちながら腰に手をやって少しずつ移動しながら、鏡の前に立つてクセ毛に手を入れた。

サカキが二つ目のボールに手をかけた頃、コロンボが鏡から振り返って言う。

「二昨日は大変でしたなあ」

来たな、とサカキが身を引き締める、この展開は予想していた、この二日、コロンボの対策は考えてある。

「恐ろしい事件でした」と、サカキはサインを書いた二つ目のボールを机に置く。

「あれほど多くの若者が、悪の道に歩みを進めていたなど、今でも信じたくありません。ですが、ロケット団の目論見が外れ、ロケット団は壊滅した、それが不幸中の幸いですよ」

「いやあしかし、ボスはまだ捕まっていない」

コロンボの言葉に、サカキは一切動揺せずに返す。

「らしいですね。しかし、あれだけの構成員が捕まった以上、もう復活はないでしょう」「どうでしょうね」と、コロンボは笑いながら首を傾げ、そう言えば、と、続ける。

「実はサカキさんとミーティングをしたというアテネさんですがね、どうやらあの襲撃事件以降、連絡がつかないようなんですよ」

「彼女が?」と、サカキはこれ見よがしに首をひねった。ここでアリバイが崩れたことに反応するのは良くない。

「ええ」と、コロンボは同意して少し溜めを作り、サカキが何かを言うのを待っていたが、彼が何も返さないと続ける。

「警察では、彼女がロケット団の構成員だとして捜索を続けています」

しばし、サカキは言葉を失ったふりをした、そして一人頷いて「なるほど、そう考えることが出来るわけですか」と、呟く。

「とてもそんなふうには見えませんでしたけどね、仕事熱心で」

「ええ、あたしもそう思いました。ですが状況が状況ですからね」

あ、そうだ、と、コロンボが続ける。

「二昨日は、サカキさん何をされていたんで? あたしはほら、一応警察ですけどポケモンを持っていないもんで、カントー警察局に缶詰にさせられていたんですがね」

この質問が来るのは当然だ、そして、サカキはアリバイを作る共犯になるロケット団

幹部を失っている、もつともらしい理由を作ることは出来るが、アリバイを偽装はできない。

「私も同じですよ、ホテルに閉じこもっていた。この試合のプレッシャーで少しナーバスになっていてね……いつもそうなんですよ、翌日の試合にそれを持ち込みたくないから、考え込むのは二日前にしている」

「それって、証明できる人いますか？」

「いいや、いませんよ。それを証明する必要があるのですか？」

疑問形に、しかし挑発的にサカキが問う。

「いいええそんな……少し気になっただけで」

コロンボは首を振ってそう言った後に続ける。

「ああ、それと、トキワジムの事件ですが、重要参考人が決まりそうです」

「誰なんです？」と、サカキは問う。

「ロケット団のね、アポロって幹部ですよ。まあ、当然ご存じないかと思いますがね」

サカキは、目の前の男の実力を低く見積もらなかった過去の自分に救われたと感じていた。

「ロケット団の幹部だって？ なにか根拠でもあるんですか？」

「いやあ、彼は高レベルのゴルバットを所持していたらしいんです。もちろんそれが直

接証拠になるわけじゃないが、容疑者の一人であることに変わりはないでしょう」

「物取りという線は、完全に捨てるのですか？」

コロンボは髪を掻きながら答える。

「刑事部長はまだ捨てていないでしょうがね、あたし個人としてはもう完全に捨てていきます」

コロンボはさらに続ける。

「このアポロって幹部はね、シルフカンパニー襲撃の時には姿を確認されていないんですよ、つまりもうカントーにはいない可能性が高い、サカキさんには申し訳ありませんがすぐに逮捕って訳にはいかないでしょうなあ」

「犯人の目星がただだけでも素晴らしいことですよ」

「ですけどね、あたしこの事件にはもうひとり関係者がいると思っっているんですよ」

その言葉に沈黙したサカキに、コロンボはさらに続ける。

「その人物はね、その時殺人現場にいて、被害者が殺害されるのを見たんだ。しかもその人物は、被害者と少なくとも初対面じゃない」

「何を馬鹿な」と、サカキはコロンボの言葉を否定する。

「何を根拠に？」

「死体の状況と位置ですよ、死体は扉に足を向け背後から襲撃されうつ伏せに倒れてい

た。ポケモンを繰り出さずにです。被害者は犯人よりも先に現場に来ていた、しかも彼が盗みをするような人間でないことはサカキさんのお墨付きだ、そうになると、彼はなんで現場にいて、しかも扉に背を向けていたのか」

コロンボは自身とサカキを交互に指さして言う。

「ちようどこんな感じだったんですよ……」

サカキは後ろを振り返り、開けっ放しの扉を確認した。そして再び前を向いて、自らを見るコロンボを見る。

「被害者とその人物はね、ジムリーダー室で何かを話していたんだ。顔なじみの相手と話すのにポケモンは繰り出さないでしょうし、被害者はその人物との会話に没入していた。だから彼は、背後から忍び寄る気配に気づけなかったんです」

サカキは黙ってその続きを催促する。

「当然犯人は、その人物の存在を知っていたはずですよ。しかし犯人はその後、まるで物取りであるかのような偽装工作をして、現場を去りました。まるでこの殺人が、ロケット団とは無関係であるように見せかけるようにね。あたし考えたんです、ロケット団の幹部であるアポロにそんな事をさせることが出来る人物で、尚且この殺人とロケット団を結び付けられたくない人物、それは、正体不明とされているロケット団のボス以外にありえないでしょう？」

サカキは、その推理をあまりにも突飛なものだとコロンボに言おうとした、実際にその権利はある。トキワジムにロケット団のボスが現れただなんて、そんな馬鹿げた話を、自分と、コロンボ以外の誰が信じるといふのか。

しかしその時、サカキの背後で「コロンボ警部！」とコロンボを呼ぶ声が不意に聞こえて、サカキはぜんまい仕掛けの人形のように後ろに振り返る。

開けっ放しの扉の向こうにいたのは、私服姿のジュンサーだった。彼女はサカキの反応の速さとその目つきに思わず硬直して、言葉を失った。

しかしコロンボは、あっけらかんと言う。

「ねえ？　意外と気づかないものなんですよ」

コロンボは扉の方に向かいながらジュンサーに手を上げて挨拶すると「これ、ありがとうございました」と、二つのボールとサインペンをレインコートに戻す。

部屋から去ろうとしていたコロンボの背中に、サカキは「コロンボさん」と声をかける。

「その人物……ロケット団のボスが誰なのか、あなたにはもう目星がついているんですか？」

コロンボは振り返り「いいええ」と答え、更に続ける。

「目星どころか、あたしや確信していますよ。ただ……証拠がなくてね」

サカキをしつかりと見据えながらコロンボはそう言つて、ジュンサーと共に部屋を去つた。

そうさ、と、サカキは鏡を見る。

証拠がない、このまま動かなければ、誰も自分がロケット団のボスだなんてわかりようがない。

13. 切札

カントー警察局、刑事部長室。

コロンボはガチャガチャとノブを回してから扉を開き、顔をしかめるケージにはにかみながら「いや……ロスでは内開きなもんでね……」と照れを隠す。

更にその後ろから「失礼します」と敬礼してからジュンサーが続き、彼女は丁寧に扉を締めた。

「なにか事件に進展がありましたか？」

コロンボはケージへの挨拶もそこそこに神妙な顔でそう言った。朝早くから呼び出された理由は、それくらいしか考えられないだろうと思っていたのだ。

だがケージは笑いながら首を振って答える。

「いいや、実は、これが見つかりましてね」

そういつたケージは机の物陰から赤いスーツケースを引っ張り上げて机の上に置く。それはコロンボが空港で探していた女物のスーツケースだった。

「まあ、明日にはロサンゼルスにお帰りになられるから、あまり意味がないかもしれませんが」

コロンボはそのスーツケースの取っ手を少し強く握って、それがグラグラと緩んでいくことを確認してから「ああ、確かにカミさんのですね……」と呟いた。

「あたしやてつきり捜査に進展があつたのかと……」

その言葉にケージは難しい顔をする。

「私もそれを願ってはいませんが、おそらくカントーを出ているであろうアポロを探すのは時間がかかります。ロケット団の残党を狩りながら、じっくりとやらなければ」

ケージはコロンボの目を見ながら続ける。

「この事件に関して、コロンボ警部には本当に助けていただいた。あなたがいなければ、我々はその事件を物取りによる放火殺人事件だと片付けていたでしょう。感謝します」

「まだ終わっちゃいませんよ」と、コロンボは呟いた。

「あの事件も、ロケット団も、まだ終わっちゃいない」

「さよう、我々も気を抜かずじっくりと捜査を続けなければ」

コロンボはその言葉に髪を掻きながら答える。

「事によっちゃあ、そのどちらも今すぐに解決できるかもしれませんよ」

ケージやジュンサーは、その言葉に背筋を伸ばす。

「なんですって!? それは一体どういう」

「彼女には言っていたんですがね、あたしあの事件が起きた時、現場には第三者がいたと考えているんです」

言われたジュンサーはケージの視線から逃れるように、宙に目線を上げた後に答える。

「はい確かに、そのようにお考えでした。たしか、トキワジムの関係者がいたと」

「何を馬鹿な」と、ケージは叫びかけたが、目の前の中年男が優れた推理力を持った敏腕刑事であることを思い出し、無言を持って説明を求める。

「現場の状況から言って、少なくとも被害者と初対面ではない人間がジムリーダー室にいたことは間違いありませんよ、だから被害者はジムリーダー室にいたし、扉に背を向けていた」

ケージはそれを頭に入れ、ゆっくりと咀嚼した後、一旦それに頷く。

コロンボはそれを確認してから更に続ける。

「そこで被害者をロケット団のアポロが殺害します。しかし、アポロはこの第三者には手を出していません、殺害を見られたのですよ？　つまりこの第三者は、トキワジムの関係者でありながら、ロケット団との関係者でもある」

ケージは神妙な顔で、ジュンサーは少し抜けたような表情で宙を見ながら頷く。それが真実だと言い切れるわけではないが、荒唐無稽とも言い切れない。

「犯人はその後、この犯行を物取りのものによるものと偽装しました、これは、この殺人と、ロケット団との関係を絶ちたからです。この殺人には、ロケット団にとつて隠したかった何かが関係していたんです。さて、秘密主義の組織であるロケット団が最も隠したい事、それは」

「ロケット団のボスの正体につながる……というわけか」

ケージの返答に、コロンボは「そうです」と答える。

「でも」と、勘のいいジュンサーが声を震わせながらコロンボに問う。

「コロンボ警部の推理だと、その第三者って」

「はい、トキワジムリーダーのサカキさんだと、あたしは確信しています」

コロンボの言葉に、今度こそケージは「馬鹿な！」と立ち上がって叫ぶ。

「サカキさんがロケット団のボスだって!? ありえない! いくらコロンボ警部とはいえ、その推理には無茶がある」

ジュンサーは両手で口元を抑え、目を潤ませている。地元トキワの英雄であるサカキが、殺人に関与しており、なおかつロケット団のボスだなんて、彼女にはとても考えられない。

それらの感情をコロンボも理解しているのだろう。彼は目を伏せながら手を降って答える。

「お気持はわかります……ですがね、あたしなりに考えるとこの答えしか無いんだ」

「そもそも、彼はトキワジムの火事を居酒屋から目撃しているだろう」

「被害者が殺されてからジムに火を放たれるまでには短くても一時間以上空きがあるんですよ？ 部下のアポロにそう命じて自分は居酒屋に行つて顔を覚えられてアリバイを作ることなんて簡単にできますよ」

それでもコロンボの推理を信じたくなかつたケージはまだ何かを考えるが、それ以上のものが出てこない、トキワジムリーダーがトレーナーとして、教育者として、人間として優れているから、その倫理観も優れているに違いないという先入観から来るもの以外、何も。

それに追い打ちをかけるようにコロンボが言う。

「サカキさんがロケット団アジト壊滅の日に会つていたと言つていたシルフカンパニーの研究者は、おそらくロケット団の構成員、信用できないアリバイです。そして、シルフカンパニー襲撃の日のアリバイは無いんです」

「しかし」と、狼狽えながらケージが返す。

「それは確信の持てる証拠ではない」

ケージの言葉に、コロンボは髪を掻いた。

「はい、確かにそのとおりです……サカキさんがロケット団のボスであるという証拠は

ありません」

そしてコロンボはしばらく沈黙した後、ケージに向かってつぶやく。

「刑事部長、ロケット団のボスと二度戦ったトレーナーと、会わせてくれませんか？ あなたなら居場所を知っているでしょう？」

コロンボの提案にケージはううむと唸ったが、黙りこくって考えてしまう。そのトレーナーの情報は、警察内部でも限られた人間しか知らない、それを、敏腕刑事であるとはいえ部外者に伝えることは、間違いなく推奨される行為ではないだろう。

「あたし明日にはロサンゼルスに帰るんですよ？」と、コロンボはケージに言い、更にダメ押しするように続ける。

「ロケット団のボスに繋がるかもしれない手がかりを、みすみす逃すんですか？」

☆

グレンタウン、カントー地方唯一のジムを持っている島は、海底火山の噴火によってできた小さな島だ。

その孤立性から、かつてはポケモン研究のメッカとして知られ、今でもその名残として、化石復元などの最新研究所が存在している。

そのグレンタウンのポケモンセンター、少年トレーナーのレッドは、ロビーに置かれたソファアーに腰掛けながら、傷ついた手持ちの回復を待っていた。

膝の上でお菓子を貪るピカチュウの頭をなでながら、レッドはグレンジムでの戦いを思い出す。

難しい試合ではなかった、グレンジムリーダーのカツラはほのおタイプのエキスパートだったが、レッドの手持ちにはそれらに対して強いみずタイプやじめんタイプのポケモンが控えていた。特に危ないと感じた場面もなく、エースのピカチュウもこうして温存できた。

それよりも、ジムリーダーとの戦いの前に出されたクイズに引つ掛けのような問題があつて未だにそれが不正解だつたことに納得がいつていない。キャタピーが進化したらトランセルになるのであつて、断じてバタフリーにはならないだろう。

ピカチュウの耳をくすぐりながら彼がそう考えていた時、ポケモンセンターの自動ドアが開いた。平日の午後一時、ポケモンセンターへの来客はそこまで多くない、レッドは何の気なしにその方を見た。

彼の視界に入ってきたのは、二人の中年男だつた。片方は少年の彼ですらわかるほどきつちりとスーツを着こなし、表情に険しさがあつたが、もう片方の方はヨレヨレのレインコートにボサボサのクセ毛のいかにもさえ無さそうな中年男、右手に持っていた葉

巻をジョーイに指摘されて、名残惜しそうにそれを携帯灰皿に仕舞っていた。

レッドは、きつちりとした方の男には見覚えがあった。タمامシティのロケット団アジト、更にはシルフカンパニーで自分に良くしてくれたケージと言う刑事だ。彼のおかげで自分は今でも静かに旅を続けることができています。

「こんにちは、いい旅を続けているようだね」と、ケージはレッドのもとに一直線に向かつて右手を差し出した。レッドは立ち上がってそれに返す。膝の上からソファに飛び降りたピカチュウも嬉しげな声を上げ、ケージに頭を撫でられた。

もうひとりの中年男は、何が珍しいのかキョロキョロとポケモンセンターを見回しながら、トボトボとケージの後に続いている。

「紹介しよう、ロサンゼルス市警のコロンボ警部だ」

「はいどうもよろしく」

ケージにそう紹介され、コロンボはレッドに右手を差し出し、レッドもそれを握った。それを見ていたピカチュウが再び嬉しげな鳴き声を上げながら得意げに短い右手を差し出したので、コロンボは腰をかがめてそれを握る。

「あれ？ 君本当にピカチュウ？ ジュンサーくんが持っていたピカチュウに比べてとてもスリムだし、尻尾の形も違うね」

コロンボの不意な質問にレッドが戸惑うより先に、ケージがそれに答える。

「彼女の鍛えようが足りんのでしよう。それに尻尾の形が違うのは性別の違いですよ。彼女が連れてきているのはメスで、この子はオスだ」

へえ、と感心したように抜けた声を上げ、コロンボはレッドに言う。

「ごめんね、あたし外国から来てるから、ポケモンのことよくわからないんだ」

にへらと笑うコロンボに、ケージが話題を急かす。

「彼も暇じゃないんだ、早く本題に入りましょう」

「ああ、そうしましょうね」と、コロンボはレインコートのポケットを探り、一枚の写真を取り出す。

「君、この人に見覚えはないかな？ 似ている人をどこかで見たとかでもいいんだけど、

例えばタママシシティとか、ヤマブキシティとかだね」

その二つの町名に、レッドはコロンボの言葉の意味するところを理解し、その写真を手にとって見た。しかし、写真の中の精悍な顔つきの男、サカキに、彼は見覚えがなかった。サカキと、彼の部下による変装は、完璧だった。

首を横に振ったレッドに、ケージはどこかホツとしたように鼻を鳴らし、コロンボは笑顔を崩さず何度も頷きながらその写真を受取る。

「そう……見覚えがないか」

コロンボはその写真をレインコートに再び戻し、レッドに問う。

「そうだ、君はジムバッジを集めて回っているんだろう？　どのくらいまで集まったのかおじさんに見せてはくれないかな」

絶対に答える必要がある問いではなかったが、レッドは誇らしげに懐からトレーナーカードを取り出して、その裏に付けられている七つのバッジをコロンボに見せる。

ほお、と息を吐くように感心しながら、コロンボは言う。

「もう七つも集めているのかい、すごいねえ。カミさんに君のことを教えたらさぞ喜ぶだろうねえ、ウチのカミさんは若くて頑張ってる子が大好きだから。ありがとう」

大人に褒められて、レッドは少し嬉しげに笑いながらそれを再び懐に戻した。

そして、コロンボが更に言う。

「残るバッジは、トキワジムのグリーンバッジだね、君はトキワジムリーダーのサカキさんを知っているかな？」

レッドは首を横に振ってそれを否定した。

「知らないの？　会ったこともない？」

レッドは首を縦に振ってそれを肯定する。

「そう、あたしは会ったことがあるけど、あの人は素晴らしいジムリーダーだ、最も、君が素晴らしいトレーナーであることも間違いないと思うけどね」

最後にコロンボは、レッドの頭を赤いキャップ越しに撫で、更にピカチュウの顎の下

と頭をくすぐった後に、ケージを引き連れてポケモンセンターを去った。

14・決着

トキワシティ、一つの事件を乗り越えようとしていたその町は、象徴であるトキワジムの活動再開と共に、日常を取り戻そうとしていた。

修復されたトキワジム、その対戦場で、サカキはポケモン達の動きをチェックしている。活動再開初日であるにもかかわらず、彼は精力的に活動し、すでに業界の権威であるオーキド博士の孫と戦い、彼を認定していた。

何も問題はない、と、サカキは自身に言い聞かせていた、幹部はすでに消息を絶ち、捕まったのはロケット団ボスの正体など何も知らないしたっば構成員のみ、このまま動かず、ただ静かに表の業務をこなしていれば、誰も自分とロケット団を結びつけること無く、いずれこの事件も風化する。ロケット団の復活は、その後でも十分だ。

ふと、トキワジム自慢のギミックである回転パネルが作動している音が聞こえた、歩道式のエスカレーターのように、利用者を移動させる装置で、ジムの構造を知り尽くしているジムトレーナーたちは、それを利用しない。

ポケモンたちをボールに戻し、新たな挑戦者だろうか、とサカキは思ったが、それにしてはおかしいと思った。挑戦者ならば、ジムトレーナー達と手合わせをしなければな

らないはずだ、しかし、壁の向こう側からそのような様子は伺えない、しかし、回転パネルは作動し続け、自分のいる対戦場の直ぐ側にまで来ている。

嫌な予感がした。そして、それは当たっていた。

「やあどうも、サカキさん」

対戦場に現れたのは、コロンボだった。その後ろを、ケージがついてくる。

「いやあ、このジムの回転パネルは素晴らしいですなあ、ですがあたし、少し目が回ってしまいまして……そう言えば、ロケット団のアジトにもこんな仕掛けがありましたなあ」

そう言う割にはしつかりとした足取りで近づいてきたコロンボに、サカキは答える。

「海外で武者修行していた時に体験したギミックでしてね、まだカントーでは馴染んでいませんが、海外では珍しくありませんよ、ロサンゼルスにはありませんか？」

「こんなの見たことがありますなあ、もしあればカミさんがキャツキヤとはしやぐでしようし」

サカキは、舌打ちをしたい衝動をこらえながら、ややきつい表情を作って、コロンボに言う。

「コロンボさん、これまでは付き合ってきましたが。ジムリーダーとしての業務を邪魔されるのは困ります。見学希望ならばきちんと手続きをとった上で」

サカキがそこまで言ったところで、コロンボは右手を上げてそれを制した。

「あたし今日でロサンゼルスに帰るんです。手続きなんか取ってる暇ありませんよ。あたしやそのこのケージ刑事部長に無理言つてここに来たんだ」

コロンボの返答に、サカキはふう、とため息をつく。

「ならば、何を見学されていきますか？」

コロンボは手を振つて否定する。

「あたし見学しに来たんじゃない、証明しに来たんですよ、サカキさん、あなたがロケツト団のボスだということをね」

その言葉に、ケージが必要以上に背筋を伸ばしたことをサカキは確認していたが、彼自身は至極冷静に返す。

「何を馬鹿な」

コロンボは「これはあたしの推理ですがね」と、サカキの否定の言葉を無視して続ける。

「被害者は、あなたがボスだというロケツト団最大の秘密を知ってしまったんでしよう。そしてそれを、あの日あなたに伝えた、脅迫か改心を論じたのかは分かりませんがね。そして、それを聞いた幹部のアポロが被害者を殺してしまつたんだ。あなたにとつてそれは意図していた殺人ではないからあなたは当然動揺したはずですが、この殺人を、自分

と、そしてロケット団と結び付けられるとまずいですからね。だからあなたは、アポロに犯行の偽装と時間差での放火を命じて、自分は居酒屋でアリバイを作ったんです」

サカキは「何を馬鹿な」と、もう一度言いながら、コロンボの後ろに佇むケージに目を向ける。ケージは一瞬サカキと目を合わせたが、すぐさま目をそらした。

「コロンボさん」と、サカキは口調を強めて言う。

「それは言いがかりにしても酷すぎるでしょう。それがカントー警察局の公式な見解だ」というのなら、到底私には納得できない、証拠でもあれば話は別ですが」

ある訳がない、その前提を知っているからこそ、サカキは強気に出る。

しかし、コロンボはサカキの目を見上げるように見つめながら、あつけらかなと答えた。

「証拠ありますよ」

「何だと？」と、サカキは思わず素の反応を返し、一瞬まずいと思つたが、それは自身が無実の罪を疑われているジムリーダーだとしても無理のない反応だろう。

コロンボは右手を振りながら続ける。

「あたしも証拠が無くて困つてました。物的証拠はありませんし、あなたがロケット団のボスだと知っている幹部は雲隠れしてる。ですがね、一人、たった一人だけ、証人がいたんですよ」

わからない、サカキは瞬間的に幾多もの人間の顔を浮かべては消したが、それでも、コロンの言っている人物が誰なのかわからない。

「勇敢なトレーナーです。ロケット団のアジトで、シルフカンパニーで、二度もあなたと戦った英雄がね、覚えていたんですよ」

コロンの言葉を黙って聞きながら、しかし心の中で馬鹿などサカキは叫んだ。それはありえない、顔は変えていたし、使うポケモンも変えていた、ボスとして活動するときには、それを第一に考えていたはずだ、ありえない、それがありえるはずない。

「今日、来てもらってるんです」

「おおい、と、コロンは後ろを向いて叫んだ。すると、ジュンサーに連れられて、一人のトレーナーが、対戦場に現れる。」

サカキは目を見開いた。赤い帽子、傍らにはピカチュウがついて歩く。それは、アジトで、シルフカンパニーで見た光景とほとんど同じだった。

「そのトレーナーです」と、コロンはそのトレーナーの肩に手をおいて言う。

「じゃあ、教えてくれるかな。ここに、あの時戦ったロケット団のボスはいるか？」

そのトレーナーは「この人です」と、右手でサカキを指さして言った。コロンは満足げに頷き、ケージは大きく息を吐く。

サカキは、激しく動揺しながら、どうすればこの窮地を切り抜けられるのか考えてい

た。そして、そのトレーナーの指先から、その目を、その体格を、そして、傍らのピカチュウをよく見た時、それに気づいて、開放された。

ふふ、と、サカキは一つ笑いを漏らす。そして、それは次第に大きくなり、最後には「あーっはっは」と右手を顔にやりながら大きく笑い、言う。

「ケージ刑事部長！ これは一体何の冗談ですか」

「見てのとおりだ」と答えたケージに、サカキは「ならばこれがカントー警察局の公式な見解だということでもよろしいのですか」と、叫ぶ。

「まるで馬鹿だ、言い表しようのない！」

コロンボは、笑うサカキに動揺しながら問う。

「何がおかしいんです？ 確かに年齢的に幼いかも लेकिन 立派な証人です、法的にも問題はないでしょう」

コロンボが大真面目にそう言うものだから、サカキは笑い半分に返す。

「下手な演技は辞めたほうがよろしい。これ以上恥を晒したくなければ、その偽物を連れて帰ったほうがいいでしょう」

偽物。

そう、偽物だった。

確かによく似ている、かつて自分を二度負かせたあのレッドという少年によくよく似

ている。

だが、似ているだけ。確かによく似ているし、声などそっくりだった。だが、その目が明らかに違えば、体格は女兒のものであるし、何より連れているピカチュウは肥えている上にしっぽに切れ目があり性別が違う。

つまり、これは偽装された証人なのだ。サカキがロケット団のボスであるという事実を証明するためにコロンボが作り出した窮地の策。

コロンボの焦りを、ミスを、サカキはついに引きずり出し、そして見破ったのだ。最大の窮地は、最大のチャンスとなった。

だが、最後の手段を看破されたはずのコロンボは、それでも神妙な表情を崩さなかった。それどころか、一つ二つ頷いてから、ケージの方を向く。

「今の、聞きましたね？」

コロンボの問いに、ケージは大きく息を吸い、それを鼻から勢いよく吐いてから答える。

「ああ、聞いた」

更にコロンボは、両手を口元に当てるジュンサーに問う。

「今の聞いたね？」

ジュンサーは涙ぐみながら、つらそうに一つ頷いて答える。

「はい、聞きました」

「今の、君も聞いたね？」

コロンボに問われ、レッドのフリをした少女も「うん」と、今度はその性別相応の声色で頷く。

サカキはそれらの意味がわからず「何を言っている？」と、戸惑いながらに問う。

そして、コロンボは一つ頷いて、ジュンサーにその少女を連れて帰るように指示してから言う。

「確かにあなたの言うとおり、あの子はロケット団のボスと戦ったトレーナーではありません。でもよく似ていたでしょう？ あたしの友達の物まねが上手な子でね、連れていたピカチュウはジュンサーの手持ちです。彼女あまりバトルが得意じゃあないから、ピカチュウもあんなに肥えてしまつて……まあ、少し肥えていたほうが可愛いと思うんですがね」

「あなた自分のしたことがわかってるんですか」と、サカキは緊張感のないコロンボに言う。

しかし、コロンボはまたもあつげらかんと答える。

「これが裁判所とかなら違法ですがね、大事なものはそこじゃないんだ」

そしてコロンボは、サカキの目を睨みつけて言う。

「大事なものはね、何故あなたが、彼女を偽物だと、見破ることができたか。ということなんです」

サカキは、コロンボの言っていることの意味が一瞬理解できなかった。しかし、時間を置いて、自身が犯したあまりにも大きなミスに気づき、額に手を当て、大きなため息をついた。

それをコロンボも感じたのだろうか「そうです」と、サカキの気づきを肯定してから続ける。

「カントー警察局はその少年に関して厳しい報道規制をかけていました。あたしだって昨日会うまでその少年が何歳なのか、どんな顔をしているのか、性別だってわからなかったんです。それなのにあなた、彼女をひと目見た瞬間、偽物だと気がついた。しかし昨日あつたその少年は、サカキさんと会ったことはないという。さて、どうしてなんでしょうねえ」

一瞬サカキはなにか言い逃れができないものだろうかと考えた、例えば、感覚的にそのような英雄は少年だろうと思っていた、とか、彼女の雰囲気とあのピカチュウは、とてもこのジムに挑戦できるものではないことを見抜いたとか、いくらでも言い逃れは出来るように思える。

しかし、もはやそれは無駄だろうと彼は諦めた。仮にこの場を凌ぎ、コロンボが口サ

ンゼルスに帰ったとしても、その後ろにいるケージはもう、自分の倫理的奴隷ではない。カントー警察局に睨まれば、もう今までのようには動けないだろう。

「ロケット団のボスとして、あなたの追求から逃れようとしていた」

彼は、目の前にいる相手を尊重し、それを認めた。

ケージは、信じられないような目で彼等を見つめ、モゴモゴとなにか言いたげに口を歪ませる。ある意味、彼がこの場で最もショックを受けた人間であるかもしれない。

「だから、トキワジムリーダーとしての私を考えることはできなかった」

あるいはもう少し精神的に落ち着いていれば、コロンボの狙いを看破することができたかもしれない。

しかし、コロンボが見せたほころびに、彼は飛びついた。

ああ、と、一つつぶやいてから、サカキがコロンボに問う。

「あともう一つだけ、質問よろしいですか？」

「ええどうぞ」

「何故、この殺人が私の指示によるものではないとお思いになられたのですか？ 私がロケット団のボスだと確信しているのなら、そう考えることも、いや、そう考えることが妥当でしょうか？」

そうだ、と、ケージも思った。

しかし、コロンボは手を振りながらそれを否定する。

「自室で殺人を犯すなんてヘマ、あなたは絶対にやらんでしよう……それに、あなたは素晴らしいトレーナーで、教育者だ、たった二週間だけカントーにいたあたしですらそう思った。そんなあなたが、神聖なトキワジムを血で汚すでしょうか？」

コロンボの返答に、サカキは頷いた。もはや大悪人である自分を、それでもトレーナーとして、教育者として認めているコロンボに、サカキは複雑な感情を抱いていた。

そして彼は、これまで誰にも語ることもできなかつた事を、コロンボに吐露する。

「実力はあるが、職に恵まれなかつたトレーナーを、評判の悪い資産家に用心棒として紹介したのが始まりだった」

それが、トキワジムリーダーとロケット団ボスとの二面生活の始まりであることを、コロンボたちは理解する。

「今ではその資産家もロケット団の傘下……裏の仕事はいくらでもあり、社会に認められないトレーナーもいくらでもいた。やがて膨らみすぎたロケット団の規模が、世界を握る寸前にまで来ていることに気づいたときには、もう、私にそれを止める意思など無かつた」

ふふ、と、サカキは小さく笑い、そして、声を震わせる。それには、多くの自虐的な要素が込められていた。

「私が殺したようなものだ。私が作り上げたロケット団が、未来ある若者を殺し、そして、殺させた。殺人の罪を問われるべきは、私なんですよ」

善と悪の二面性、それらを抑え込んでいたサカキの強靱な精神力が揺らいでいた、その責任に、ジムリーダーとしてのサカキは、常に苛まれていたのだろう。

コロンボは、サカキの懺悔を、静かに聞いていた。その時、彼等の耳に、回転パネルが作動している音が聞こえた。

「ああ」と、コロンボは呟く。

「挑戦者が、来たようですなあ」

やがて現れた赤い帽子の少年トレーナーは、対戦場にいる男たちを見て驚いた。昨日あつた刑事たちと、彼が差し出した写真に写っていた男、少年は、事態を飲み込めないでいるようだった。傍らのピカチュウは、その少年の戸惑いに戸惑う。

コロンボは、サカキに目を向けて言う。

「彼はもう、バッジを七つ集めて、このジムのバッジが最後の一つだそうです。ロケット団のボスとしてではなく、トキワジムのジムリーダーとして、彼の前に」

サカキはそれに頷かなかつたが、その目線は、すでに少年をとらえている。ロケット団のボスとしてではなく、最強のジムリーダーとして、それは、彼にとつても願つてもないことだった。

サカキが、少年に対して何かを語りかけたが、コロンボはそれをすべて聞くこと無く彼等に背を向ける。彼は、教育者としてのサカキを否定するつもりはなかった。

すれ違いざまに、コロンボはケージに「後のことは」と声をかけ、ケージは「もちろん」と、強く言つて頷いた。

カントー警察局には、どんな手段を使つてもサカキをロケット団のボスとして逮捕するという大仕事が残っている、その際に受けるであろう世間からのバッシング、絶対的な正義であると思われていたサカキに裏切られたことによる市民の不安、それらは、これまでカントー警察局が経験したことのないものだろう。

そして、キョウやエリカ等のジムリーダー達も、サカキという絶対的な支柱と、その信頼を失うことによつて、大きな窮地に立たされるかもしれない。

カントー地方は、大きく揺れるだろう。

それらを間近で見ずに済むのは幸せなことだ、と、コロンボは対戦場を後にしながら思った。